

高校簿記 実教出版

商業036

各講座へジャンプします。クリックしてください。

第1章 企業の簿記

第11章 固定資産の記帳

第21章 仕訳伝票と3伝票制

第2章 簿記の要素

第12章 決算(その1)

第 章 3分法の整理

第3章 取引と勘定

第13章 手形取引の記帳

第 章 貸倒の見積

第4章 仕訳と転記

第14章 その他債権の記帳

第 章 減価償却

第5章 仕訳帳と総勘定元帳

第15章 有価証券の記帳

第 章 8桁精算表

第6章 試算表

第16章 営業費の記帳

模擬問題集

第7章 決算

第17章 資本の記帳

第8章 現金・預金の記帳

第18章 税金の記帳

第9章 商品売買の記帳

第19章 決算(その2)

第10章 掛け取引の記帳

第20章 帳簿

第1章 企業の簿記

1 簿記の意味

- 簿記とは、企業の経営活動を一定の記帳方法に従って、帳簿に記録し、計算・整理を行うことである。

2 簿記の目的

- ① 一定時点における現金、銀行預金、債権、債務、建物、備品などの現在高(**財政状態**)を明らかにする。
- ② 一定の期間における商品の売買、給料や広告料の支払い、家賃の受け取りなどによって、企業がどれだけの利益をあげたかを定期的に計算し、その内容(**経営成績**)を明らかにする。

3 簿記の種類

① 単式簿記

現金の収入・支出の記録・計算を中心に特に定まった組織的な方法によらないで記帳する簿記。

② 複式簿記

すべての経営活動について、一定の記帳方法によって組織的に記録・計算・整理する簿記。

3 簿記の種類

① 営利簿記

個人商店や会社などのように営利を目的としている企業で用いられている簿記。

② 非営利簿記

営利を目的としない官公庁などで用いられている簿記。

營利簿記

```
graph LR; A[營利簿記] --- B[商業簿記]; A --- C[工業簿記]; A --- D[銀行簿記];
```

商業簿記

工業簿記

銀行簿記

4 簿記の歴史

- 14世紀頃のイタリアの商人によって考案された。
- 15世紀になると、活版印刷の技術が発明され、世界最初の簿記書が発刊される。
- 日本には明治6年(1873年)頃に紹介される。

5 簿記の基礎的要件

① 会計単位

簿記の記録・計算・整理の対象となる範囲。

② 会計期間

一定の基幹的な区切りをつけ、財政状態や、経営成績を明らかにする。

会計期間の初めを期首、終わりを期末という。

③ 貨幣金額表示

貨幣金額で表示することのできないものは、簿記の記録の対象にならない。

第2章 簿記の要素

教科書p6

1 資産・負債・資本と貸借対照表

1 資産

企業の経営活動に必要な財貨や債権。

覚える！

現金・売掛金・貸付金・商品
建物・備品・土地など

1 資産・負債・資本と貸借対照表

2 負債

企業の経営活動によって生じた債務

覚える！

買掛金・借入金など

1 資産・負債・資本と貸借対照表

3 資本

企業がもっている資産の総額から負債の総額を引いた額を純資産という。

覚える！

資産－負債＝資本（資本等式）

1 資産・負債・資本と貸借対照表

4 貸借対照表(Balance Sheet B/S)

企業の一定の期日の**財政状態**(資産、負債、および資本の状態)を明らかにする表。

覚える！

貸借対照表等式
資産＝負債＋資本

貸借対照表

資産 2,500	負債 500
	資本 2,000

貸借対照表では、左側の資産の合計額と、右側の負債と資本の合計額は必ず一致する。

1 資産・負債・資本と貸借対照表

千代田商店

貸借対照表
平成〇年1月1日

作成年月日を記入

商店名を記入

余白の斜線

資 産		金 額	負債および純資産		金 額
現 金		400,000	買 掛 金		300,000
売 掛 金		500,000	借 入 金		200,000
商 品		1,200,000	資 本		2,000,000
備 品		400,000			
		2,500,000			2,500,000

合計線

締切線

期首に作成した貸借対照表を、**期首貸借対照表**といい、**期末**に作成する貸借対照表を**期末貸借対照表**という。

1 資産・負債・資本と貸借対照表

5 資産・負債・資本の増減と純損益の計算

期首の資産・負債・資本が増減・変化した結果、**期末資本が期首資本より大きい場合には、その差額を、当期純利益または純利益**といい、逆の場合は、**当期純損失または純損失**という。(財産法)

覚える！

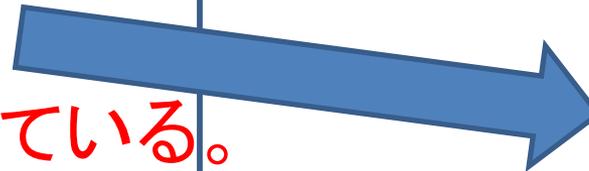
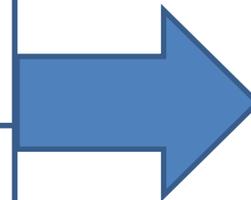
期末資本－期首資本＝当期純利益
(マイナスの時は当期純損失)

期首貸借対照表

期首 資産 ¥2,500,000	期首 負債 ¥500,000
	期首 資本 ¥2,000,000

期末貸借対照表

期末 資産 ¥2,800,000	期末 負債 ¥700,000
	期末 資本 ¥2,100,000



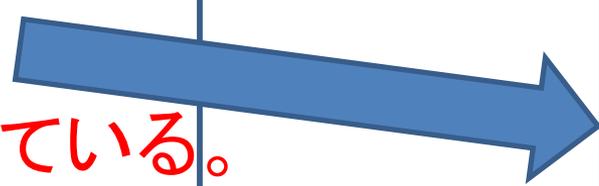
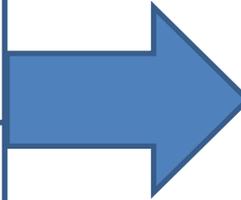
資本が¥100,000増加している。
当期純利益¥100,000となる。

期首貸借対照表

期首 資産 ¥2,500,000	期首 負債 ¥500,000
	期首 資本 ¥2,000,000

期末貸借対照表

期末 資産 ¥2,800,000	期末 負債 ¥700,000
	期首 資本 ¥2,000,000
	当期純利益 ¥100,000



資本が¥100,000増加している。
当期純利益 ¥100,000となる。

確認問題2

1. 会計期間のはじめを(**期首**)終わりを、(**期末**)という。

確認問題2

2. 千代田商店の平成〇年1月1日の資産は、次のとおりであった。
資産の名称と金額および資産総額はいくらか。

- 一万円札 40枚
- 商品を賭で売り上げたときの債権 ¥500,000
- 販売用の電器製品。 ¥1,200,000
- 営業用の商品陳列ケース ¥250,000 とレジスター ¥150,000

資産名

金額

(現金)	(¥400,000)
(売掛金)	(¥500,000)
(商品)	(¥1,200,000)
(備品)	(¥400,000)

資産総額 ¥2,500,000

確認問題2

3. 千代田商店の平成〇年1月1日の負債は、次のとおりであった。

これらの負債の名称と金額および負債総額はいくらか。

仕入代金の債務	¥ 300, 000
銀行からの借入債務	¥ 200, 000

負債名	金額
-----	----

(買掛金)	(¥ 300,000)
---------	---------------

(借入金)	(¥ 200,000)
---------	---------------

負債総額

¥ 500,000

確認問題2

4. 次のものは、何という資産か、負債か、答えなさい。

(1) 営業用の金庫 (備品)

(2) 商品の掛仕入れで生じる債務 (買掛金)

(3) 現金の貸し付けによって生じる債権 (貸付金)

確認問題2

5. 資本等式を完成させなさい。

$$\left(\text{資産} \right) - \left(\text{負債} \right) = \left(\text{資本} \right)$$

確認問題2

6. 問題2と3の資産総額と負債総額から千代田商店の、平成〇年1月1日の資本の額を計算しなさい。

資産総額

¥2,500,000

負債総額

¥500,000

資本額

¥2,000,000

—

=

確認問題2

7. 大阪商店の平成〇年1月1日の資産と負債から、
(1) 資産の総額 (2) 負債の総額 (3) 資本の額を求めなさい。

現金	¥100,000	売掛金	¥350,000	商品	¥250,000	備品	¥300,000
買掛金	¥200,000	借入金	¥100,000				

(1) 資産の総額 (**¥1,000,000**)

現金 ¥100,000 売掛金 ¥350,000 商品 ¥250,000 備品 ¥300,000

(2) 負債の総額 (**¥300,000**)

買掛金 ¥200,000 借入金 ¥100,000

(3) 資本の額 (**¥700,000**)

¥1,000,000 — **¥300,000** = **¥700,000**

確認問題2

6. 企業の財政状態を明らかにする表を
(**貸借対照表**)という。

2 収益・費用と貸借対照表

1 収益

企業の経営活動によって、資本が増加する原因を**収益**という。

覚える！

商品売買益・受取手数料・
受取家賃・受取利息など

2 費用

企業の経営活動によって、資本が**減少**する原因を**費用**という。

覚える！

給料・広告料・支払家賃・
支払家賃・支払地代・通信費
消耗品費・保険料・修繕費・
水道光熱費・雑費・支払利息

2 収益・費用と貸借対照表

3 収益・費用の発生と純損益の計算

純損益は、一会計期間に生じた**収益の総額**から**費用の総額**を差し引くことによって算出できる。(損益法)

覚える！

収益総額－費用総額＝当期純利益
(マイナスのとき当期純損失)

確認問題3

1. 大阪商店の平成〇年1月1日から同年12月31日までの収益と費用によって、この期間の純損益を求めなさい。

商品売買益	¥ 1, 0 0 0, 0 0 0	➔ 収益
受取手数料	¥ 5 0, 0 0 0	
		¥ 1,050,000
給料	¥ 5 5 0, 0 0 0	➔ 費用
支払家賃	¥ 2 4 0, 0 0 0	
雑費	¥ 2 5, 0 0 0	
支払利息	¥ 3 5, 0 0 0	
		¥ 850,000

$$(¥ 1,050,000) - (¥ 850,000) = (¥ 250,000)$$

プラスなので当期純利益 ¥ 250,000

2 収益・費用と貸借対照表

4 損益計算書

(Profit and Loss Statement: P/L)

企業の一会計期間の収益と費用の内容を経営成績といい、この経営成績を明らかにする表を損益計算書という。

覚える！

損益計算書等式

費用 + 当期純利益 = 収益

費用 = 収益 + 当期純利益

当期純利益の場合

収益総額－費用総額＝プラスの場合

<p>費用 85,000</p>	<p>収益 185,000</p>
<p>当期純利益 100,000</p>	

当期純**損失**の場合

収益総額－費用総額＝マイナスの場合

費用 85, 000	収益 80, 000
	当期純損失 5, 000

確認問題3

2. 次の資料にもとづき、千代田商店の損益計算書を作成しなさい。

商品売買益 ￥150,000 受取手数料 ￥35,000

給料 ￥60,000 広告料 15,000 支払利息 10,000

損益計算書

千代田商店

平成○年1月1日から平成○年1月31日まで

費用	金額	収益	金額
給料	60,000	商品売買益	150,000
広告料	15,000	受取手数料	35,000
支払利息	10,000		
当期純利益	100,000		
	185,000		185,000

期末貸借対照表

損益計算書

期末 資産 ¥2,800,000	期末 負債 ¥700,000
	期首 資本 ¥2,000,000
	当期純利益 ¥100,000

費用 85,000	収益 185,000
当期純利益 100,000	



一致する!

第3章 取引と勘定

1 取引

- 資産・負債・資本を増減させる事柄を、簿記では取引という。

2 勘定

1 勘定と勘定科目

- 記録・計算を行うためにもうけられる簿記上の区分単位を**勘定**という。
- この勘定につけられた名称を**勘定科目**という。

勘定

貸借対照表に属する勘定

損益計算書に属する勘定

資産の勘定

負債の勘定

費用の勘定

収益の勘定

現金
売掛金
商品
貸付金
建物
備品
土地
など

買掛金
借入金
など

資本の勘定

資本金
など

給料
広告料
通信費
支払家賃
消耗品費
雑費
支払利息
など

商品売買益
受取手数料
受取利息
など

2 勘定

2 勘定口座とその形式

- 勘定ごとにその増減を記録・計算するために儲けた帳簿上の場所を**勘定口座**という。
- 勘定口座の形式には、**標準式**と**残高式**がある。
- 簿記では、左側を**借方**、右側を**貸方**という。

勘定口座

<標準式>

現金

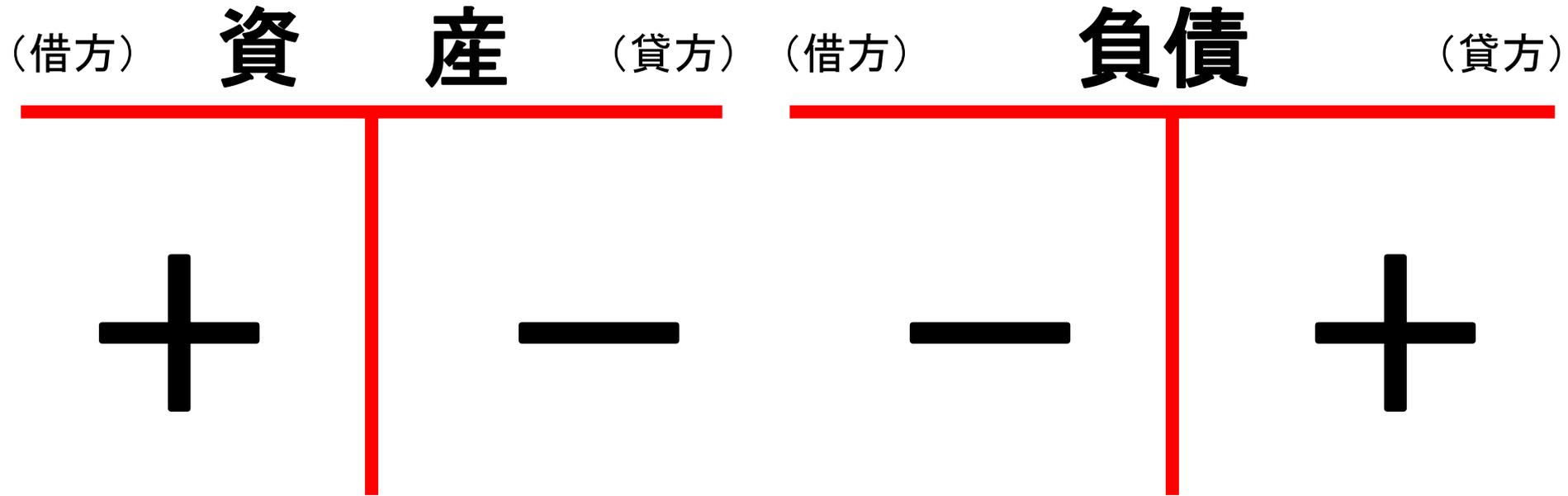
平	成年	摘	要	仕	借	平	成年	摘	要	仕	貸	方

<残高式>

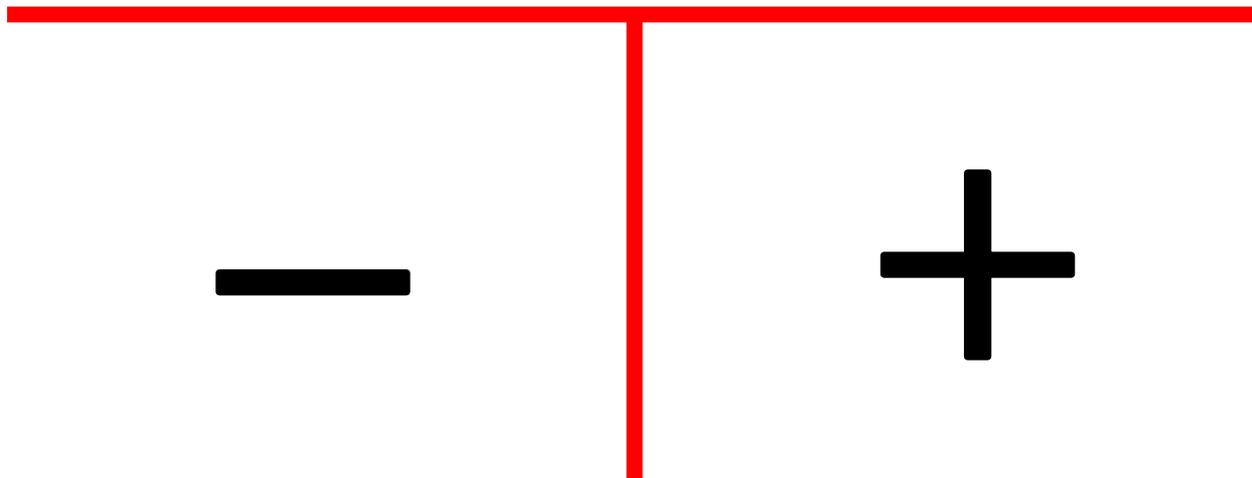
現金

平	成年	摘	要	仕	借	貸	借	残
							または 貸	高

3 勘定記入法(貸借対照表)



(借方) 資本 (貸方)



資 産

負債

+

-

-

+

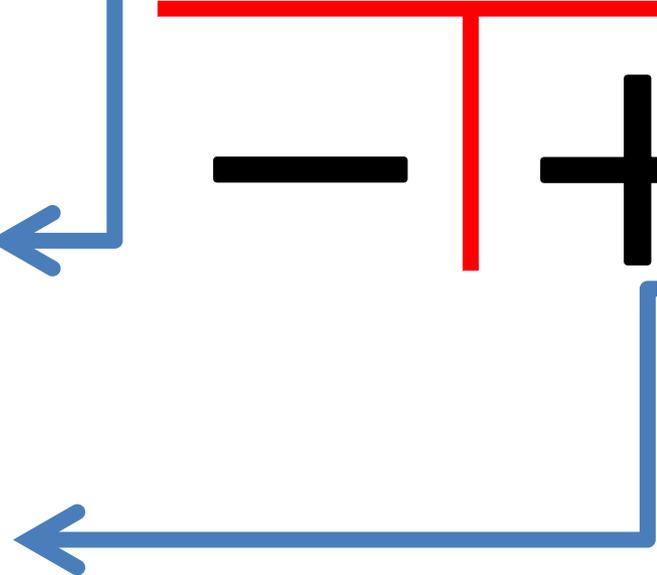
資本

-

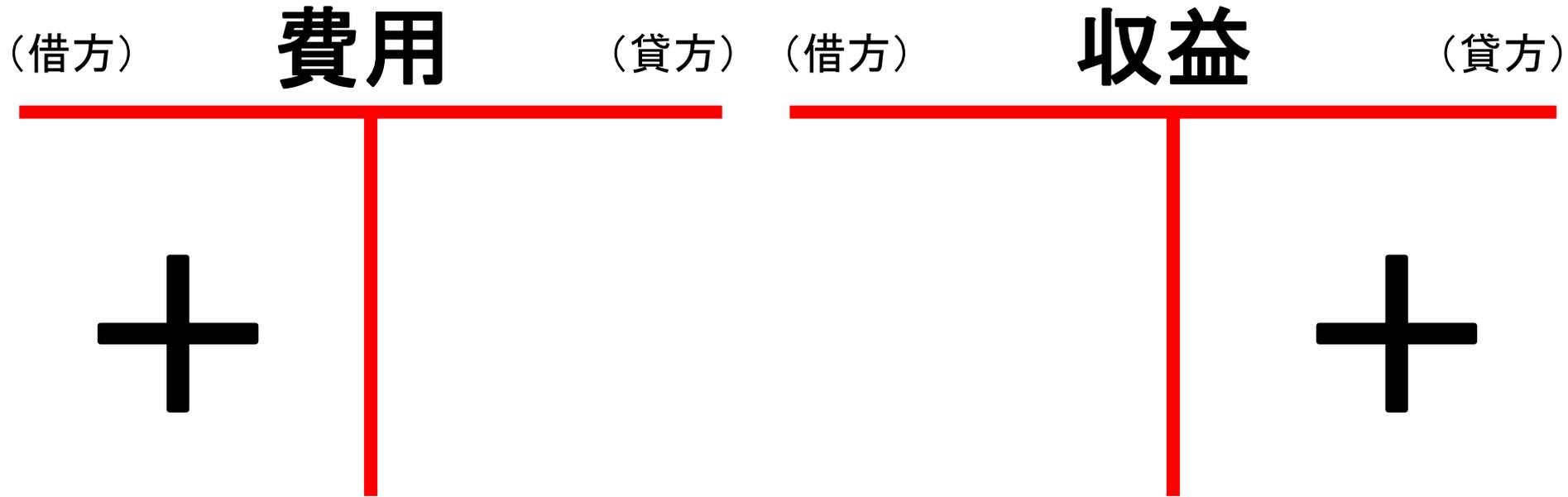
+

貸借対照表

資産の勘定	負債の勘定
	資本の勘定



3 勘定記入法(損益計算書)



(借方)

費用

(貸方) (借方)

収益

(貸方)

+

+

損益計算書

費用の勘定

収益の勘定

当期純利益

4 取引要素の結合関係

取引



取引の分解



取引の結合関係

4 取引要素の結合関係

商品30,000を仕入れ、代金は現金で支払った。



「商品30,000を仕入れた。」「現金30,000を支払った。」に分解。



「資産(商品)30,000の増加」「資産(現金)30,000の減少」

第4章 仕訳と転記

1 仕訳

- 簿記では、取引が発生すると、その取引を**借方の要素**と**貸方の要素**に分解し、

①どの勘定の**借方**に、いくらを金額を記入するかを決める。

②どの勘定の**貸方**に、いくらを金額を記入するかを決める。



この手続きを**仕訳**という。

1月1日 現金¥500,000を出資して、開業した。

仕訳

(借)現金 500,000 (貸)資本金 500,000

転記

現金

資本金

1/1 資本金500,000

1/1 現金500,000

1月5日 商品¥300,000を仕入れ、代金は掛けとした。

(借) 商 品 300,000 (貸) 買掛金 300,000

商 品

買掛金

1/5 買掛金300,000

1/5 商品300,000

1月13日 原価¥200,000の商品を¥290,000で売り渡し、代金は現金で受け取った。

(借) 現金 290,000 (貸) 商品 200,000
商品売買益 90,000

現金

1/ 1 資本金500,000
1/13 諸 口 290,000

商 品

1/5 300,000 1/13 商品200,000

商品売買益

1/ 13 現金90,000

1月24日 本月分の給料¥80,000を現金で支払った。

(借) 給料 80,000 (貸) 現金 80,000

現金

1/ 1	500,000	1/24	80,000
1/13	290,000		

給料

1/24	80,000
------	--------

1月25日 買掛金のうち¥150,000を現金で支払った。

(借) 買掛金 150,000 (貸) 現金 150,000

現金

1/ 1	500,000	1/24	80,000
1/13	290,000	1/25	150,000

買掛金

1/25	150,000	1/5	300,000
------	---------	-----	---------

4月6日 商品¥80,000を仕入れ、代金は掛けとした。
(借)商品 80,000 (貸)買掛金 80,000

商品

買掛金

4/6	80,000
-----	--------

4/6	80,000
-----	--------

4月10日 売掛金¥30,000を現金で受け取った。
(借)現金 30,000 (貸)売掛金 30,000

現金

売掛金

4/10	30,000
------	--------

4/10	30,000
------	--------

4月12日 広告料¥15,000を現金で支払った。
(借)広告料 15,000 (貸)現金 15,000

現金

広告料

4/12 15,000

4/12 15,000

4月15日 原価¥50,000の商品を¥75,000で売り渡し、代金は現金で受け取った。

(借) 現金 75,000 (貸) 商品 50,000
商品売買益 25,000

現金

4/15 75,000

商品

4/15 50,000

商品売買益

4/15 25,000

次の各項目を、収益と費用に分類しなさい。

給料 広告料 商品売買益 支払家賃 通信費
受取手数料 雑費 支払利息 受取利息

収益

商品売買益 受取手数料 受取利息

費用

給料 広告料 支払家賃 通信費 雑費 支払利息

次の各等式の、□のなかに、当てはまる適当な語を記入しなさい。

1 損益計算書等式

費用総額 + **当期純利益** = 収益総額

費用 85,000	収益 185,000
当期純利益 100,000	

次の各等式の、□のなかに、当てはまる適当な語を記入しなさい。

2 損益法の計算式

収益総額 - 費用総額 = **当期純利益または当期純損失**

費用 85,000	収益 185,000
当期純利益 100,000	

問題集 P8 2-3 目標時間5分

山形商店の平成〇年1月1日から平成〇年12月31日までの収益と費用は、次の通りであった。よって、損益計算書を完成しなさい。

商品売買益 ￥940,000 受取手数料 ￥30,000 給料 ￥380,000
 広告料 ￥170,000 支払家賃 ￥240,000 支払利息 ￥20,000

損益計算書

(山形)商店 平成〇年(1)月(1)日から平成〇年(12)月(31)日まで

費用	金額	収益	金額
給料	380,000	商品売買益	940,000
広告料	170,000	受取手数料	30,000
支払家賃	240,000		
支払利息	20,000		
当期純利益	160,000		
	970,000		970,000

問題集 P8 2-4 目標時間5分

2. 宮城商店の平成〇年1月1日から平成〇年12月31日までの費用・収益は、次の通りである。

商品売買益 ¥794,000 受取手数料¥126,000 受取利息 ¥350000

給料
雑費¥
(1)①

収益総額955,000 - 費用総額893,000

損益計算書
平成〇年1月1日から平成〇年12月31日まで

費用総額893,000

収益総額955,000

費用	金額
給料	487,000
広告料	139,000
支払家賃	168,000
雑費	74,000
支払利息	25,000
当期純利益	62,000
	955,000

収益	金額
商品売買益	794,000
受取手数料	126,000
受取利息	35,000
	955,000

問題集 P9 2-5 目標時間5分

	期首資本	期末			収益総額	費用総額	純利益	純損失
		資産	負債	資本				
(1)	630,000	930,000	390,000	540,000	680,000	770,000	/	90,000

期首B/S

資産	負債
	資本 630,000

期末B/S

資産	負債 390,000
	資本 930,000 540,000

P/L

費用 770,000	収益 680,000
	当期純損失 90,000

問題集 P9 2-5 目標時間5分

	期首資本	期末			収益総額	費用総額	純利益	純損失
		資産	負債	資本				

(2)	720,000	1,580,000	600,000	980,000	910,000	650,000	260,000	
-----	---------	-----------	---------	---------	---------	---------	---------	--

期首B/S

資産	負債
	資本 720,000

期末B/S

資産 1,580,000	負債 600,000
	資本 980,000

P/L

費用 650,000	収益 910,000
当期純損失 260,000	

問題集 P9 2-5 目標時間5分

	期首資本	期末			収益総額	費用総額	純利益	純損失
		資産	負債	資本				

(3)	700,000	1,195,000	350,000	845,000	875,000	730,000	145,000	
-----	---------	------------------	---------	---------	---------	----------------	----------------	--

期首B/S

資産	負債
	資本 700,000

期末B/S

資産	負債 350,000
	資本 1,195,000 845,000

P/L

費用 730,000	収益 875,000
当期純損失 145,000	

問題集 P9 2-6 目標時間3分

次の各項目の金額から、(1)収益総額(2)費用総額(3)純損益の額を計算しなさい。

現金 ¥250,000 売掛金 ¥300,000 商品 ¥420,000

備
商品

(3)収益総額560,000 - 費用総額470,000

給料 ¥210,000 広告料 ¥60,000 支払家賃 ¥180,000

(2)費用総額470,000

(1)収益総額560,000

費 用	金 額	収 益	金 額
給 料	210,000	商品売買益	490,000
広 告 料	60,000	受取手数料	70,000
支 払 家 賃	180,000		
雑 費	20,000		
当期純利益	90,000		

問題集 P9 2-7 目標時間10分

福島商店の期末の資産と負債、及び期間中の収益と費用は次の通りであった。

期末の資産と負債

現金 ¥374,000 売掛金 ¥682,000 商品 ¥563,000
 備品 ¥300,000 買掛金 ¥519,000 借入金 ¥200,000

期間中の収益と費用

商品売買益 ¥1,170,000 受取手数料 ¥134,000

資本金、純損益はどう求める？

貸借対照表

資産総額 1,919,000

負債総額 719,000

(12)

現金	374,000
売掛金	682,000
商品	563,000
備品	300,000

買掛金	519,000
借入金	200,000

期末資本

1,919,000 - 719,000

1,919,000

1,919,000

問題集 P9 2-7 目標時間10分

福島商店の期末の資産と負債、及び期間中の収益と費用は次の通りであった。

期末の資産と負債

現金 ¥374,000 売掛金 ¥682,000 商品 ¥563,000
 備品 ¥300,000 買掛金 ¥519,000 借入金 ¥200,000

期間中の収益と費用

商品売買益 ¥1,170,000 受取手数料 ¥134,000

(2)収益総額1,304,000－費用総額1,104,000

損益計算書

費用総額1,104,000 から平 収益総額1,304,000

給料	750,000
広告料	158,000
支払家賃	180,000
支払利息	16,000
当期純利益	200,000
	1,304,000

商品売買益	1,170,000
受取手数料	134,000
	1,304,000

問題集 P9 2-7 目標時間10分

福島商店の期末の資産と負債、及び期間中の収益と費用は次の通りであった。

期末の資産と負債

現金 ¥374,000 売掛金 ¥682,000 商品 ¥563,000

備品 ¥300,000 買掛金 ¥519,000 借入金 ¥200,000

期間中の収益と費用

商品売買益 ¥1,170,000 受取手数料 ¥134,000

給料 ¥750,000 広告料 ¥158,000 支払家賃 ¥180,000

支払利息 ¥16,000

貸借対照表

(福島) 商店

平成〇年(12)月(31)日

資 産		金 額	負債及び純資産		金 額
現 金	金	374,000	買 掛 金	金	519,000
売 掛	金	682,000	借 入 金	金	200,000
商 品	品	563,000	資 本 金		1,000,000
備 品	品	300,000	当 期 純 利 益		200,000
		1,304,000			1,304,000

簿記 中間考查範囲

- 教科書p26 問題集p17まで
- B/S P/L
- 計算問題
- 仕訳と総勘定元帳(ともに略式)
 - * 元帳については「日付・相手勘定科目・金額」
 - * 黒字・赤字記入、合計・締切線(定規使用)
(線のフリーハンド記入は減点)
 - * 電卓を用意すること。

簿記上の取引となるものに○、そうでないものに×を記入しなさい。

- (1) 仕入れ先に商品を注文した。 ×
- (2) 仕入れ先から商品を現金で仕入れた。 ○
- (3) 得意先から商品の注文を受けた。 ×
- (4) 得意先へ商品を掛けで売り渡した。 ○
- (5) 建物を借りる契約を結んだ。 ×
- (6) 本月分の家賃を現金で支払った。 ○
- (7) 店員を雇い入れた。 ×
- (8) 店員に本月分の給料を現金で支給した。 ○
- (9) 店先の商品の一部が盗まれた。 ○
- (10) 建物が火災によって焼失した。 ○

次の勘定科目のうち、資産にはA、負債にはP資本にはK費用にはV収益にはGの記号を記入しなさい。

(1) 給料	V	(10) 貸付金	A
(2) 現金	A	(11) 受取手数料	G
(3) 広告料	V	(12) 借入金	P
(4) 売掛金	A	(13) 資本金	K
(5) 商品売買益	G	(14) 消耗品費	V
(6) 買掛金	P	(15) 建物	A
(7) 支払家賃	V	(16) 雑費	V
(8) 商品	A	(17) 備品	A
(9) 通信費	V	(18) 支払利息	V

勘定口座に増加、減少または発生の語を記入しなさい。

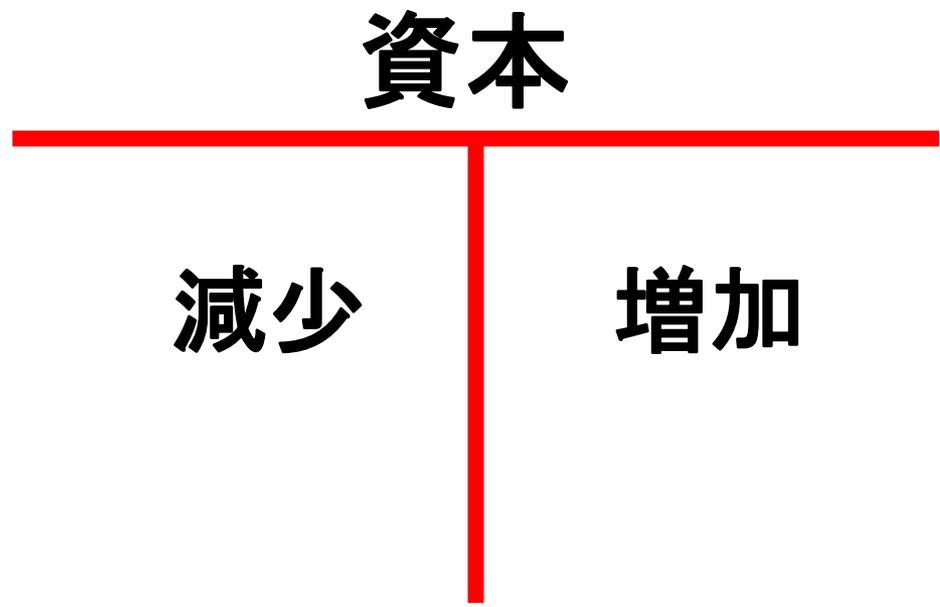
資 産

負債

増加	減少
-----------	-----------

減少	増加
-----------	-----------

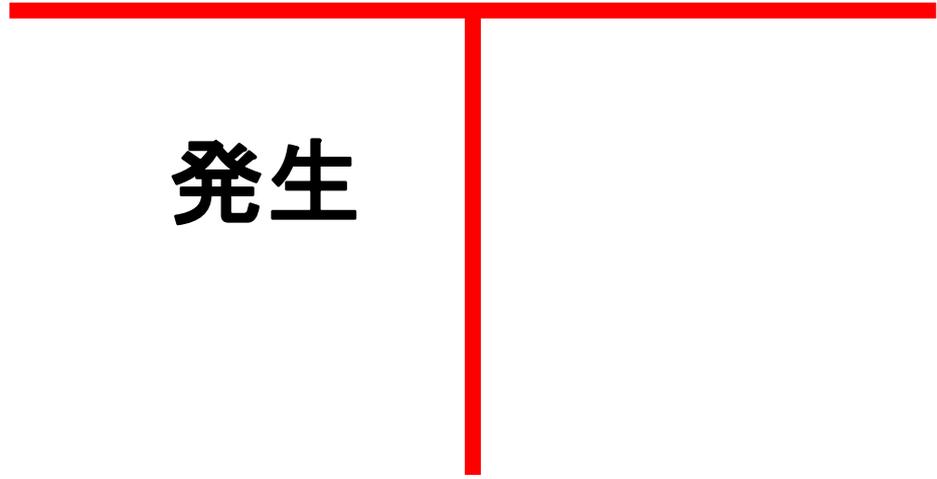
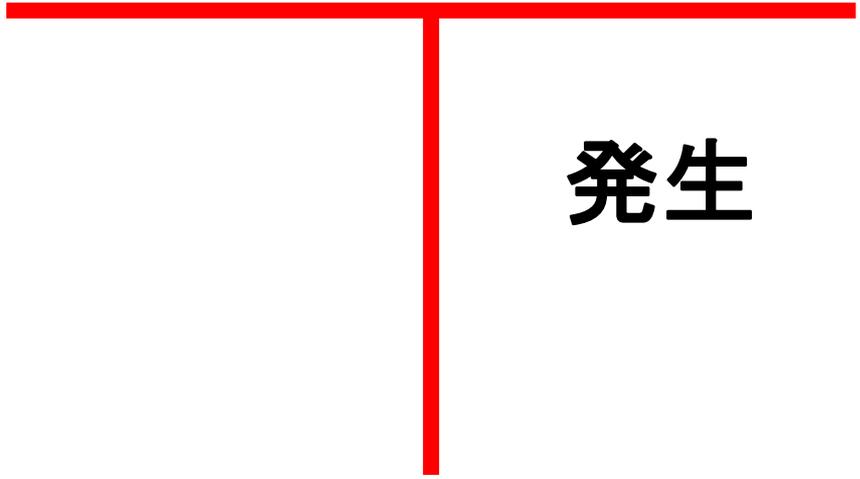
勘定口座に増加、減少または発生の語を記入しなさい。



勘定口座に増加、減少または発生の語を記入しなさい。

収益

費用



第5章 仕訳帳と総勘定元帳

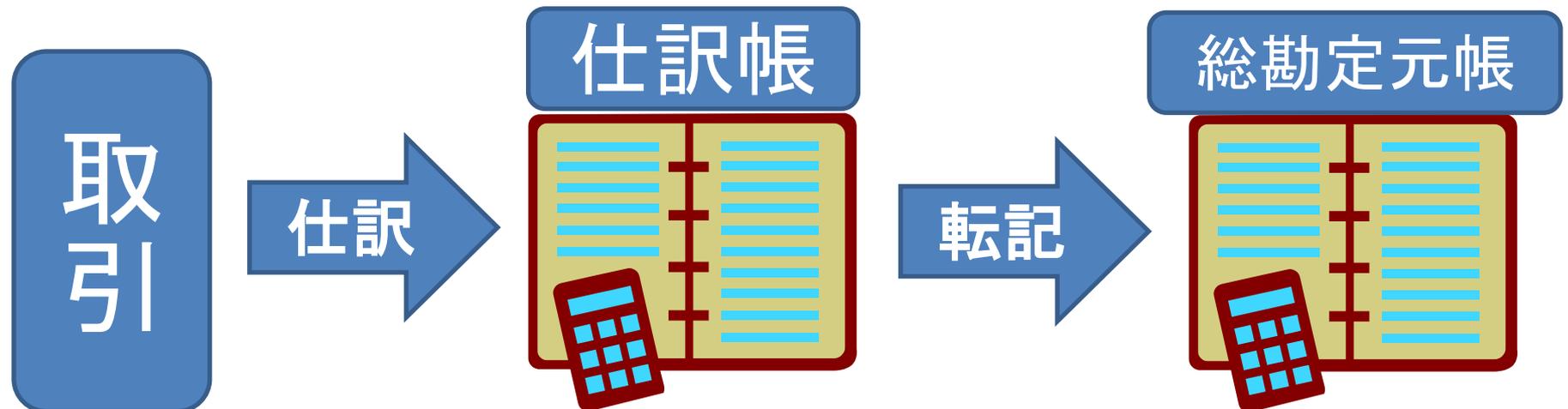
1 仕訳帳と総勘定元帳の意味

簿記の手続き

取引→仕訳→転記

仕訳を記入する帳簿→仕訳帳

勘定口座に転記→総勘定元帳



2 仕訳帳の記入法

4月1日 現金¥500,000を出資して、開業した。
(借)現金 500,000 (貸)資本金 500,000

仕 訳 帳

1

平	成	摘	要	元	借	貸
年	年			丁	方	方
4	1	(現金)		1	500,000	
			(資本金)	7		500,000
		元入れして開業				

2 仕訳帳と総勘定元帳(標準式)の記入法

4月1日 現金¥500,000を出資して、開業した。
 (借)現金 500,000 (貸)資本金 500,000

仕 訳 帳

1

平	成	摘 要	元	借 方	貸 方
4	1	(現金)	1	500,000	
		(資本金)	7		500,000
		元入れして開業			

総 勘 定 元 帳

(標準式)

現 金

1

平	成	摘 要	仕	借 方	平	成	摘 要	仕	貸 方
4	1	資 本 金	1	500,000					

2 仕訳帳と総勘定元帳(残高式)の記入法

4月1日 現金¥500,000を出資して、開業した。
 (借)現 金 500,000 (貸)資本金 500,000

仕 訳 帳

1

平	成	摘 要	元	借 方	貸 方
4	1	(現 金) (資 本 金) 元入れして開業	1 7	500,000	500,000

総 勘 定 元 帳

(残高式)

現 金

1

平	成	摘 要	仕	借 方	貸 方	借	または	残 高
4	1	資 本 金	1	500,000		借		500,000

2 仕訳帳の記入法

4月15日 商品¥250,000を¥350,000で売り渡し、代金は、現金¥200,000を受取り、残額は掛けとした。

仕 訳 帳

平	成	摘 要	元	借 方	貸 方
年	月		丁		
4	1	(現 金)	1	500,000	
		(資 本 金)	7		500,000
		元入れして開業			
4	15	諸 口			
		(現 金)	1	200,000	
		(売 掛 金)	2	150,000	
		(商 品)	3		250,000
		(商品売買益)	8		100,000
		岐阜商店に売り渡し			

記帳上の注意

- ①文字は楷書で、数字も見やすいように明瞭に書く。
- ②文字・数字の大きさは、行間の2/3から1/2ぐらいとし、下のけい線によせて書く。
- ③数字は、3桁ごとに「,」(コンマ)をつける。ただし、金額欄に位取りけい線があるときはつけない。
- ④けい線は赤で引く。見出し行の上部、金額欄の左右及び締切線は複線とする。
- ⑤数字の訂正は、1字だけの間違いでも数字全部に赤の複線を引き、その上部に正しい数字を記入する。文字の訂正は、間違った文字だけに赤の複線を引き、その上部に正しい文字を記入する。けい線の訂正は、間違ったけい線の両端に赤で×印をつけ、正しいけい線を引く。いずれも訂正箇所には訂正印を押す。

第6章 試算表

1 試算表の意味と種類

仕訳帳から総勘定元帳に転記が正しく行われたかどうかを確かめる目的として作成される表を**試算表**という。

試算表の種類

- 合計試算表
- 残高試算表
- 合計残高試算表

取引

仕訳

仕訳帳

転記

総勘定元帳

決算手続き

試算表

2 試算表と貸借平均の原理

簿記では、取引を借方と貸方に分解し、借方金額と貸方金額は常に等しくなるように仕訳される。

この仕訳を各勘定の借方、貸方に転記する。



ある勘定の借方金額＝他の勘定の貸方金額

貸借平均の原理

全勘定の借方金額の合計額＝全勘定の貸方金額の合計額

仕訳

①	(借)	A 勘定	200	(貸)	B 勘定	200	
②	(借)	A 勘定	100	(貸)	C 勘定	100	
③	(借)	D 勘定	80	(貸)	A 勘定	80	
④	(借)	C 勘定	50	(貸)	A 勘定	50	
			<u>430</u>				<u>430</u>

転記

A 勘定

①	200	③	80
②	100	④	50

B 勘定

①	200
---	-----

C 勘定

④	50	②	100
---	----	---	-----

D 勘定

③	80
---	----

A勘定

① 200
② 100

③ 80
④ 50

B勘定

① 200

C勘定

④ 50

② 100

D勘定

③ 80

合計試算表

借方	勘定科目	貸方
300	A勘定	130
	B勘定	200
50	C勘定	100
80	D勘定	
430		430

3 試算表の作成

- 勘定科目欄に、資産、負債、資本、収益、費用の順に勘定科目を記入。
- 元帳欄に、勘定口座の番号を記入。
- 日付を記入。

合計試算表

平成〇年4月30日

現金 1

借方		元帳	勘定科目	貸方
4/ 1	500,000	1	現金	80,000
4/13	290,000	2	買掛金	
4/24	80,000	3	資本	
		4	商品売買益	
		5	給料	
	790,000			



合計試算表の作成

各勘定の、**借方合計額**と**貸方合計額**を集めて作成する。

合計試算表

平成〇年4月30日

現金 1				借方	元帳	勘定科目	貸方
4/ 1	500,000	4/24	80,000	790,000	1	現金	80,000
4/13	290,000				2	買掛金	
					3	資本金	
					4	商品売買益	
					5	給料	

← 一致する! →

残高試算表の作成

各勘定口座の、**残高**を集めて作成する。

残高試算表

平成〇年4月30日

現金

1

借方

元帳

勘定科目

貸方

4/ 1 500,000 | 4/24 80,000

710,000

1

現 金

4/13 290,000

2

買 掛 金

3

資 本 金

4

商 品 売 買 益

5

給 料

← 一致する! →

合計残高試算表の作成

合計試算表と残高試算表を一つにまとめて作成する。

合計残高試算表

平成〇年4月30日

借 方		元帳	勘定科目	貸 方	
残高	合計			合計	残高
710,000	790,000	1	現 金	80,000	
		2	買 掛 金		
		3	資 本 売 買		
		4	商 品		
		5	給 料		

次の勘定記録から、合計試算表を完成しなさい。

現金 1

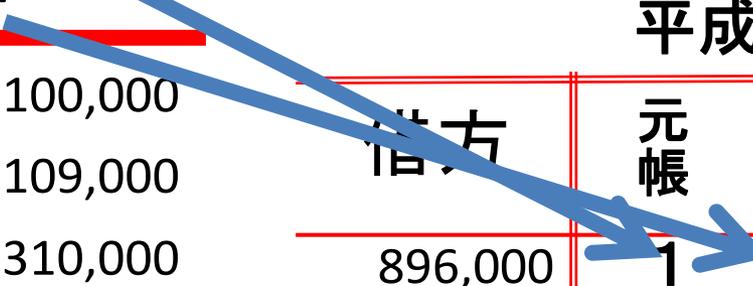
500,000	100,000
34,000	109,000
82,000	310,000
280,000	
借方合計 896,000	貸方合計 519,000

売掛金 2

200,000	280,000
230,000	
借方合計 430,000	貸方合計 280,000

合計試算表 平成〇年3月31日

借方	元帳	勘定科目	貸方
896,000	1	現金	519,000
430,000	2	売掛金	280,000
560,000	3	商品	420,000
310,000	4	買掛金	460,000
	5	資本金	500,000
	6	商品売買益	126,000
70,000	7	給料	
39,000	8	雑費	
2,305,000			2,305,000



次の勘定記録から、残高試算表を完成しなさい。

現金 1

820,000 567,000

借方に残額
253,000

売掛金 2

593,000 120,000

借方に残額
475,000

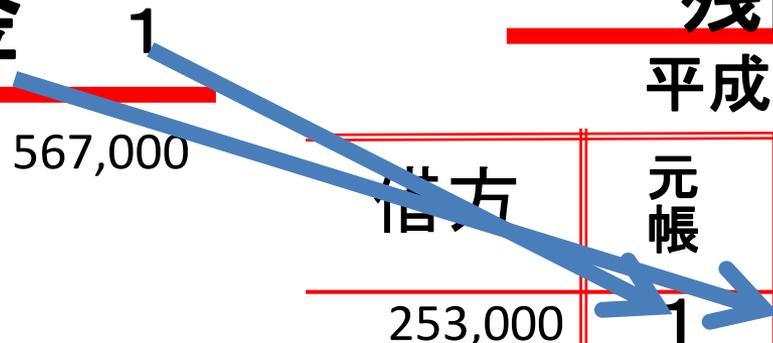
買掛金 4

195,000 416,000

貸方に残額
221,000

残高試算表 平成〇年3月31日

借方	元帳	勘定科目	貸方
253,000	1	現金	
475,000	2	売掛金	
560,000	3	商品	
	4	買掛金	221,000
	5	借入金	20,000
	6	資本金	500,000
	7	商品売買益	273,000
140,000	8	給支	
10,000	9	払利息	
1,194,000			1,194,000



次の取引を勘定口座の()に金額だけを記入し、合計残高試算表を完成しなさい。

現金 1

851,000	369,000
(160,000)	(85,000)
(140,000)	(200,000)
	(47,000)

借方合計
1,151,000

貸方合計
701,000

合計残高試算表

平成〇年4月30日

借 方		元帳	勘定科目	貸 方	
残高	合計			合計	残高
450,000	1,151,000	1	現金	701,000	
		2	現売掛		
		3	商買掛		
		4	借入金		
		5	借入金		

現金 1

851,000	369,000
(160,000)	(85,000)
(140,000)	(200,000)
	(47,000)

借方合計 1,151,000

貸方合計 701,000

買掛金 4

300,000	580,000
(85,000)	(180,000)

商品売買益 7

176,000
(39,000)
(40,000)

売掛金 2

640,000	228,000
(169,000)	(160,000)

借方に残額 450,000

借入金 5

(200,000)	200,000
-----------	---------

商品 3

940,000	560,000
(180,000)	(130,000)
	(100,000)

資本金 6

700,000

受取手数料 8

46,000

給料 9

90,000

雑費 10

38,000
(47,000)

第7章 決算

1 決算の意味と手続き

- 会計期間の経営成績と期末の財政状態を明らかにするために行う手続きを決算といい、期末の決算を行う日を決算日という。

決算の手続き

- 【 期末の帳簿の記録を整理。
- 【 すべての帳簿を締め切る。
- 【 損益計算書・貸借対照表を作成。

I 決算予備手続き

仕訳帳の締めきり

すでに学んだ

試算表の作成

すでに学んだ

棚卸表の作成

精算表の作成

今回のテーマ

Ⅱ 決算本手続き

総勘定元帳の締めきり



繰越試算表の作成



仕訳帳(決算仕訳)の締めきり

Ⅱ 決算本手続き

総勘定元帳の締めきり

1. 収益・費用の各勘定残高の損益勘定への振替
2. 損益勘定で計算された当期純利益の資本金勘定への振替
3. 収益・費用の各勘定と損益勘定の締めきり
4. 資産・負債の各勘定と資本金勘定の締めきり

Ⅲ 決算報告

損益計算書の作成



貸借対照表の作成

2 精算表の作成



3 総勘定元帳の締め切り

1. 収益・費用の各勘定残高を損益勘定に振り返る。
2. 損益勘定で計算された当期純利益(当期純損失)を資本金勘定に振り替える。
3. 収益・費用の各勘定と損益勘定を締め切る
4. 資産・負債の各勘定と資本金勘定を締め切る。

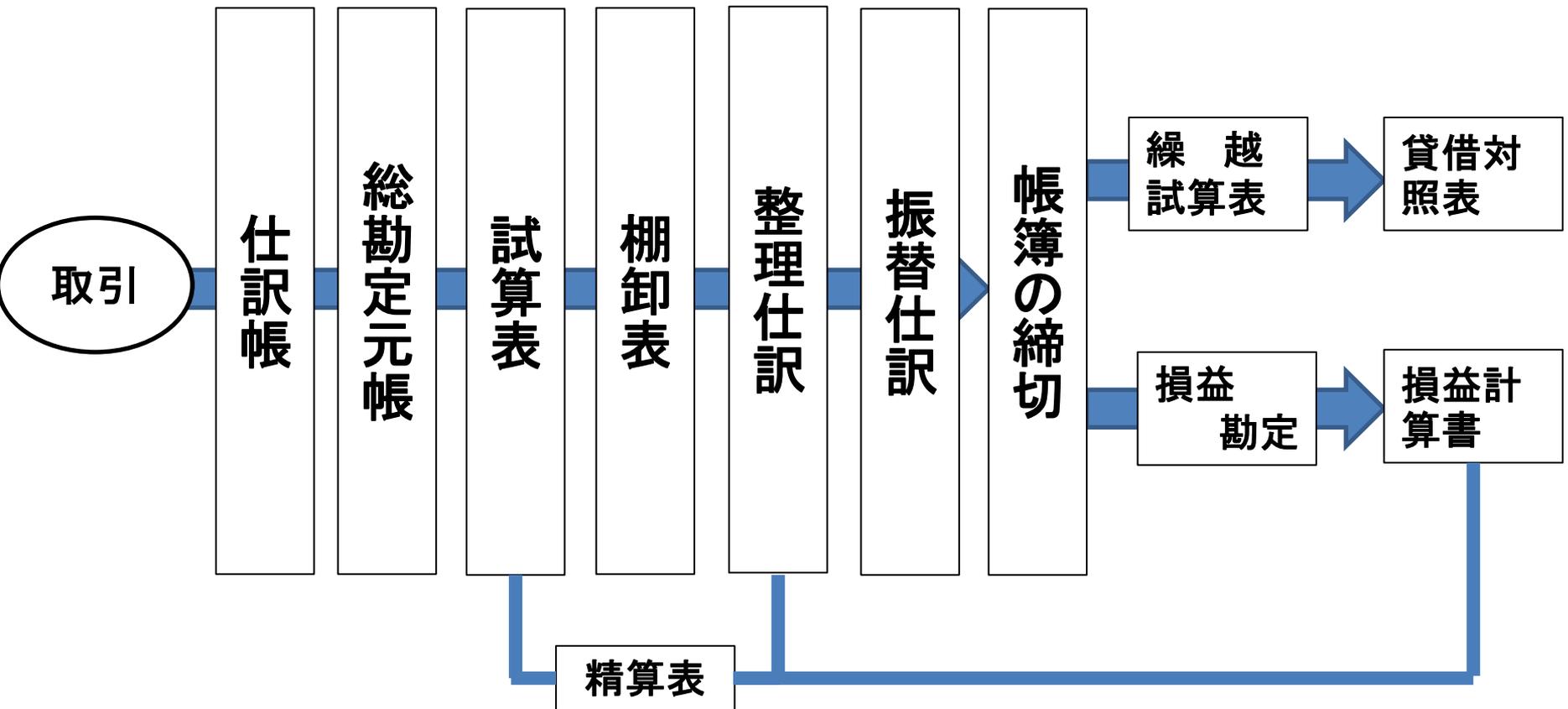
4 繰越試算表の作成

5 仕訳帳の締めきり

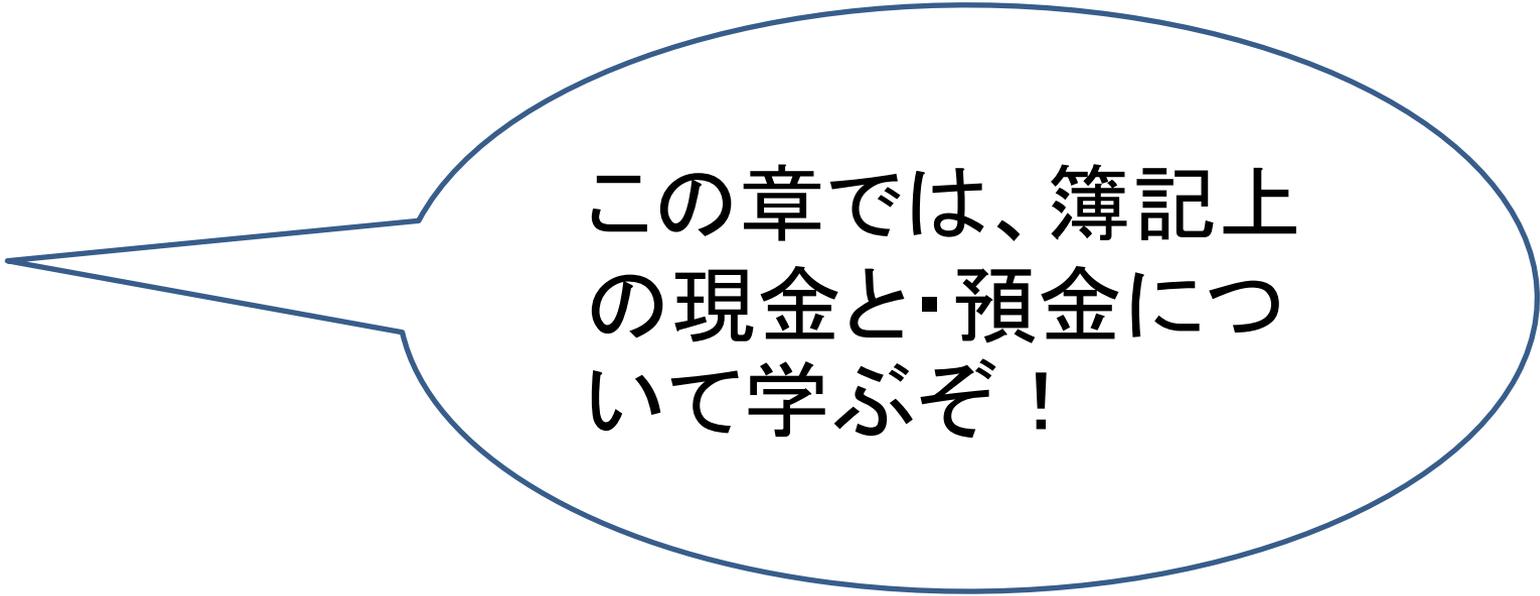
6 損益計算書と貸借対照表の作成

7 複式簿記の基本的な仕組み

8 簿記一巡の手続き

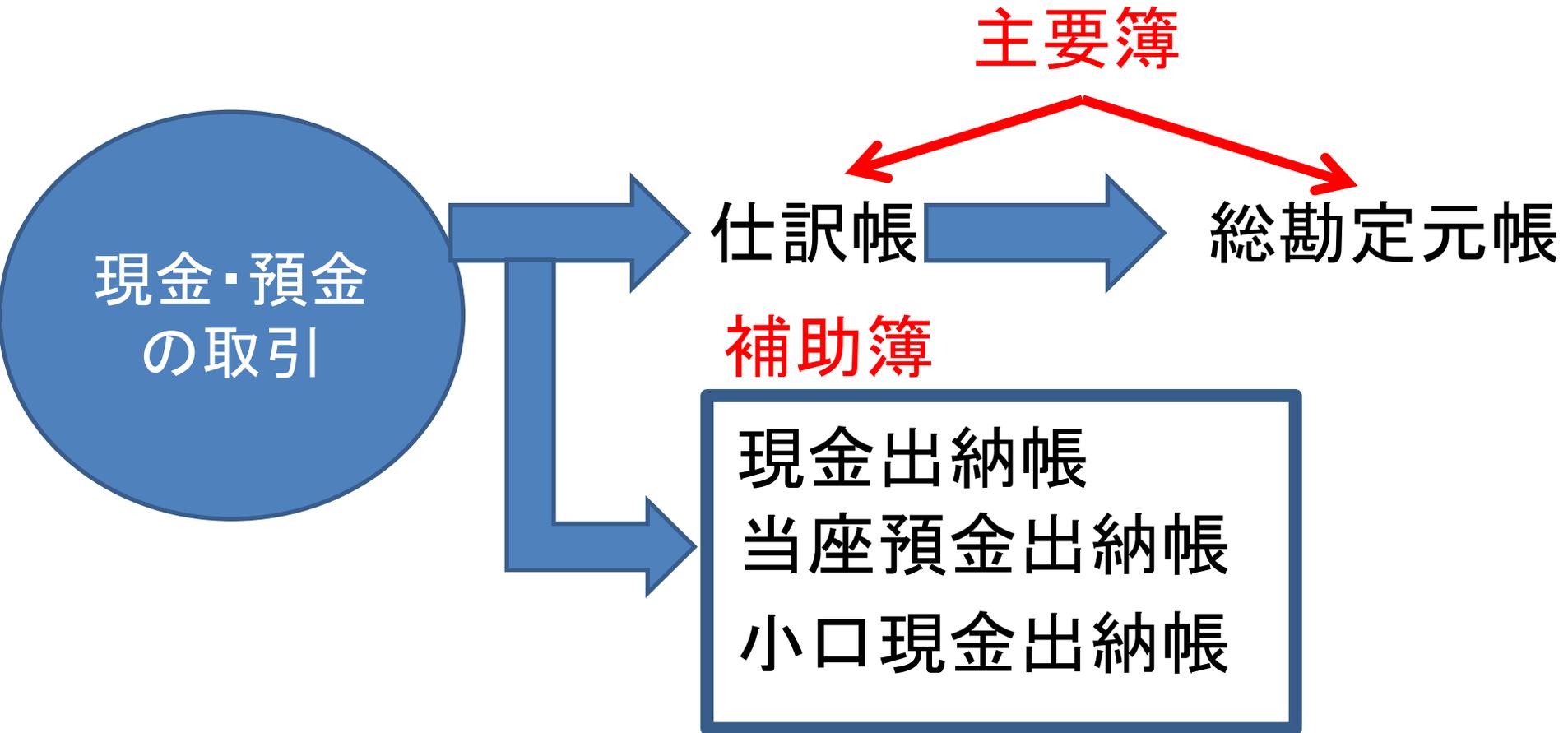


第8章 現金・預金の記帳



この章では、簿記上の現金と・預金について学ぶぞ！

第8章 現金・預金の記帳



1 現金とは(簿記では)

- 通貨のほか、いつでも現金にかえられるものをいう。

現金で扱ういろいろなもの

- ① 他人振り出しの小切手
- ② 郵便為替証書
- ③ 支払期日の到来した公社債の利札
- ④ 配当金領収書

5月6日 文京商店に対する売掛金¥100,000を、
同店振り出しの小切手で受け取った。

(借) 現金 100,000 (貸) 売掛金 100,000

現金

売掛金

5/6 売掛金100,000

5/6 現金 100,000

他人振り出しの小切手を受け取ったときは、現金で処理する。

5月8日 荒川家具店から金庫¥210,000を買い
入れ、代金のうち、¥100,000は文京商店から受
け取った小切手を渡し、残額は現金で支払った。

(借) 備品 210,000 (貸) 現金 210,000

備品

現金

5/8 現金 210,000

5/8 備品 210,000

基本問題 1 (3分法で)

6月1日、渋谷商店に原価¥150,000の商品を¥210,000で売り渡し、代金は同店振り出しの小切手で受け取った。この取引の仕訳を答えなさい。

(借) 現金 210,000 (貸) 売上 210,000

現金

6/1 売上 210,000

売上

6/1 現金 210,000

2 現金出納帳

- 現金収支の取引の明細を記入する補助簿。

みんな、
寝てない？

3 現金過不足勘定

- 現金の実際有高が、現金勘定や現金出納帳の帳簿残高と一致しないとき**現金過不足勘定**で処理する。



現金

6/1 売上 210,000 6/2 仕入 150,000

借方に残額
60,000

そこで、どうするか？

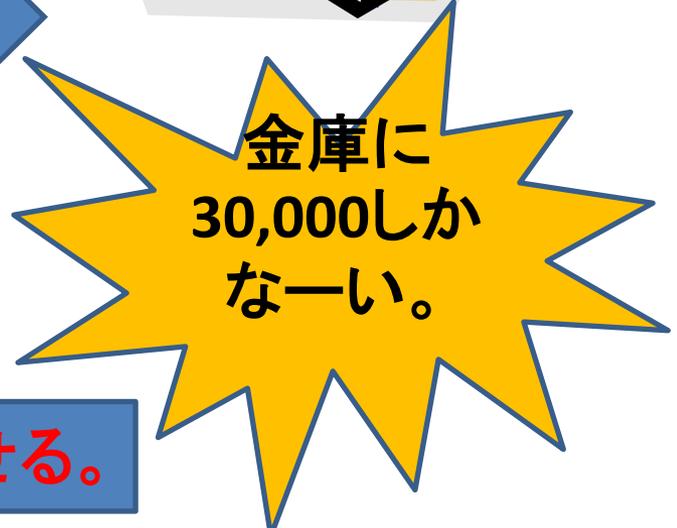
- とりあえず、実際有高に一致させる。
- 原因がわかったときに、処理し直す。
- わからなかったときは雑損(雑益)で処理する。



現金

6/1 売上 210,000 6/2 仕入 150,000

借方に残額
60,000



この場合の仕訳は

(借) 現金過不足 30,000 (貸) 現金 30,000

現金

6/1 売上 210,000

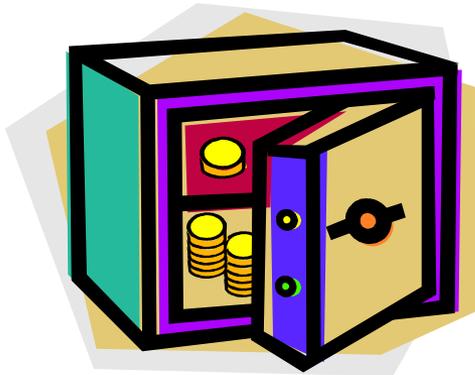
6/2 仕入 150,000

とりあえず、借方残額
30,000になったぞ！

6/2 現金過不足 30,000

現金過不足

6/2 現金 30,000



金庫 30,000

原因がわかった時（通信費の記入漏れ）の仕訳は

(借) 通信費30,000 (貸) 現金過不足 30,000

通信費

5/3 現金過不足 30,000

現金

6/1 売上 210,000

6/2 仕入 150,000

6/2 現金過不足 30,000

現金過不足

6/2 現金 30,000

6/3 通信費 30,000



金庫 30,000

6/1 (借) ~~現金過不足30,000~~ (貸) 現 金 30,000

6/5 (借) 通 信 費30,000 (貸) ~~現金過不足 30,000~~

原因がわからなかったときの仕訳は

(借) 雑損30,000 (貸) 現金過不足 30,000

雑損

5/3 現金過不足 30,000

現金

6/1 売上 210,000

6/2 仕入 150,000

6/2 現金過不足 30,000

現金過不足

6/2 現金 30,000

6/3 雑損 30,000



金庫 30,000

例題 2

6月22日 現金の実際有り高を調べたところ、
¥73,000で帳簿残高¥76,000より、¥3,000少な
かった。

(借) 現金過不足 3,000 (貸) 現金 3,000



金庫 73,000

現金

6/1 売上 76,000

1 当座預金

- 銀行との当座取引契約によって預ける無利息の預金である。この預金を引き出す時には一般に小切手を用いる。

6月1日 新日本銀行と当座取引契約を結び、現金¥200,000を預け入れた。

(借) 当座預金 200,000 (貸) 現金 200,000

6月5日 小切手#1を振り出して、川崎商店に対する買掛金¥150,000を支払った。

(借) 買掛金200,000 (貸) 当座預金 200,000

小切手を振り出した場合は当座預金の減少！！

6月10日 港商店に対する売掛金のうち、
¥180,000を同店振り出しの小切手で受け取り、
直ちに当座預金に預け入れた。

(借) 当座預金180,000 (貸) 売掛金200,000

6月20日 新橋商店に原価¥110,000の商品を
¥140,000で売り渡し、代金は同店振り出しの小
切手で受け取り、直ちに当座預金に預け入れた。

(借) 当座預金140,000 (貸) 売上 140,000

「小切手で受け取り、直ちに預け」ときたら、当座預金の増加！！

2 当座借越

- 当座借越契約を結ぶことにより、当座預金の残高を超えて小切手を振り出した場合に、銀行が借越限度額まで支払いに応じる。

例題 5

6月12日 原宿商店から商品¥270,000を仕入れ、小切手#2を振り出して支払った。ただし、当座預金残高は¥230,000で当座借越契約による借越限度額は¥300,000である。

(借) 仕入	270,000	(貸) 当座預金	230,000
		当座借越	40,000

当座預金

6/1 売上	230,000	6/12 仕入	230,000
--------	---------	---------	---------

当座借越

6/12 仕入	40,000
---------	--------

例題 5

6月16日 現金¥185,000を当座預金に預け入れた。
ただし、当座借越が¥40,000ある。

(借) 当座借越 40,000 (貸) 現金 185,000
当座預金 145,000

当座預金

6/1 売上 230,000
6/16 現金 145,000

6/12 仕入 230,000

当座借越

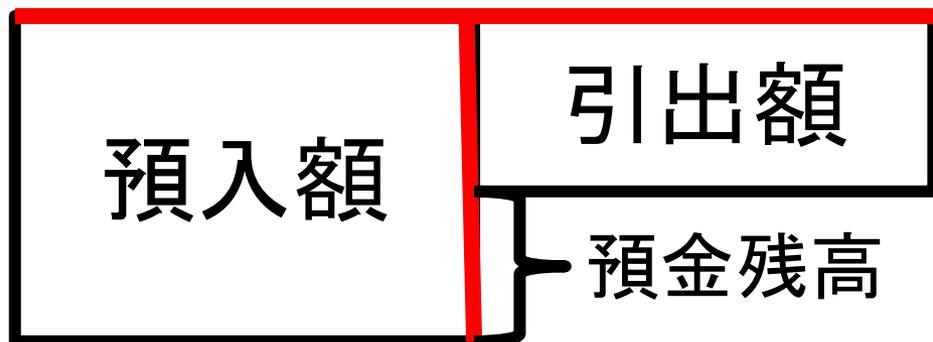
6/16 仕入40,000 6/12 仕入40,000

2 当座預金

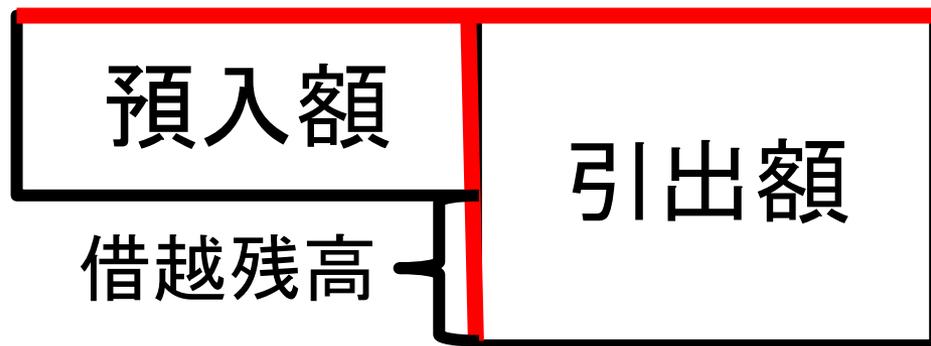
3 当座勘定

- 当座預金の残高を超えて小切手を振り出したときなどに、そのつど借越額と返済額を当座借越勘定に記入することは実務上はんざつなので、当座預金の記帳と当座借越の記帳を一つの勘定にまとめて行う方法。

当座



当座



4 当座預金出納帳

- 当座預金の預け入れと引き出しについての明細を記帳するために、補助簿として、取引銀行別に当座預金出納帳を用いる。

その他の預金

普通預金・定期預金・通知預金などについては、それぞれの勘定口座を設けて、当座預金の預け入れや引き出しの場合と同じ方法で記帳する。これらの預金をまとめて、諸預金勘定(資産)で処理してもよい。

1 小口現金勘定

- 一般に企業では、受け取った現金や小切手などは、すぐ当座預金に預け入れ、仕入れ代金などの支払いは、原則として小切手を振り出すことが多い。
- しかし、小額の支払いのたびに小切手を振り出すのは、かえって手数料がかかる。
- そこで、小口の支払いを担当する係に、一定の現金を前渡ししておき、そこから支払いにあてさせる方法がとられる。

2 定額資金前渡法

- ① 会計係は一定期間（例えば一ヶ月）の支払予定額を定め、同額の小切手を、小口現金を扱う小払係に前渡ししておく。
- ② 小払係は、その月の小口現金の支払いをすべて小口現金出納帳に記入し、月末に会計係に対してその支払い報告をする。
- ③ 会計係はその額と同額の小切手を翌月分の小口現金として小払係に渡す。

3 小口現金出納帳

- ① 小口現金を受け入れたときは、日付・摘要・収入欄及び残高欄に記入。
- ② 小口現金を支払ったときは、日付・摘要・支出欄とその支出の内訳を記入し、残高を記入。
- ③ 月末に支出欄および内訳欄の合計を記入し、内訳欄を締め切る。
- ④ 補給額を収入欄に記入し、繰越額を支出欄に赤記し、それぞれ合計し、締め切る。

第9章 商品売買の記帳

1 分記法と3分法

- 商品を買入れたときは、借方に商品、売り上げたときは、貸方に商品を記入し、差額を商品売買益(損)とする方法を分記法という。
- 分記法では、売り上げのつど、その商品の仕入原価を調べなければならない。
- そこで、商品売買の記帳を、3つの勘定(繰越商品・仕入・売上)で処理する3分法が広く行われている。

9月5日 千葉商店に¥100,000で仕入れたブラウスを¥120,000で売り渡し、代金は掛けとした。

- 分記法(これまでのやり方)

(借)	売掛金	120,000	(貸)	商	品	100,000
				商品	売買益	20,000

- 3分法

(借)	売掛金	120,000	(貸)	売上	120,000
-----	-----	---------	-----	----	---------

9月9日 千葉商店に売り渡した商品について、
¥2,000の値引きを行い、値引き額は売掛金から
差し引くことにした。

- 3分法

(借) 売上2,000 (貸) 売掛金 2,000

9月10日 埼玉商店から,商品¥284,000を仕入れ、代金は掛けとした。

- 分記法(これまでのやり方)

(借) 商品284,000 (貸) 買掛金 284,000

- 3分法

(借) 仕入284,000 (貸) 買掛金 284,000

9月12日 埼玉商店から仕入れた商品のうち、品違いのため、¥41,200を返品し、代金は買掛金から差し引くことにした。

- 3分法

(借) 買掛金41,200 (貸) 仕入 41,200

9月16日 神奈川商店に商品¥145,000を売り渡し、代金は掛けとした。なお発送運賃¥2,400は現金で支払った。

- 3分法

(借)	売掛金	145,000	(貸)	売上	145,000
	発送費	2,400		現金	2,400

9月20日 栃木商店から商品¥184,500を仕入れ、代金は小切手を振り出して支払った。なお、**引取運賃**¥3,600は現金で支払った。

- 3分法

(借)	仕入	188,100	(貸)	当座預金	184,500
				現金	3,600

9月26日 茨城商店に商品¥309,000を売り渡し、
代金は同店振り出し小切手を受け取った。

- 3分法

(借) 現 金309,000 (貸) 売 上 309,000

(1) 藤沢商店から商品¥60,000を仕入れ、代金は掛けとした。

- 3分法

(借) 仕 入 60,000 (貸) 買掛金 60,000

(2) 三浦商店に商品¥75,000を売り渡し、代金のうち¥50,000は同店振り出しの小切手で受取り、残額は掛けとした。

- 3分法

(借)	現 金	50,000	(貸)	売 上	75,000
	売掛金	25,000			

(3)川口商店から商品¥80,000を仕入れ、代金は掛けとした。

なお、引取運賃¥1,500は現金で支払った。

(借) 仕 入 81,500 (貸) 買掛金 80,000
現金 1,500

ポイント 仕入諸掛は、仕入に含める。

(4)川口商店から仕入れた商品のうち¥5,000を、品質不良のため返品し、代金は買掛金から差し引くことにした。

(借) 買掛金 5,000 (貸) 仕 入 5,000

(5) 大宮商店に商品¥54,000を売り渡し、代金は掛けとした。

なお、発送運賃¥2,000は現金で支払った。

(借)	売掛金	54,000	(貸)	売	上	54,000
	発送費	2,000		現	金	2,000

ポイント 発送諸掛は、発送費勘定で処理。

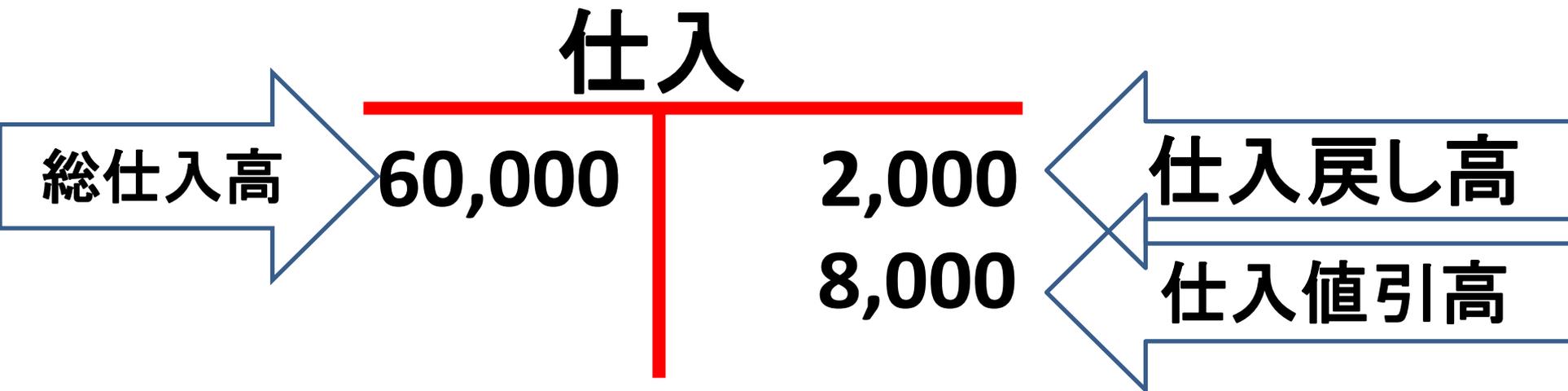
(6) 大宮商店に売り渡した商品について、¥2,700の値引きを行い、代金は売掛金から差し引くことにした。

(借)	売	上	2,700	(貸)	売掛金	2,700
-----	---	---	-------	-----	-----	-------

この違いわかるかな？

- 総仕入高と純仕入高
- 総売上高と純売上高

総仕入高と純仕入高

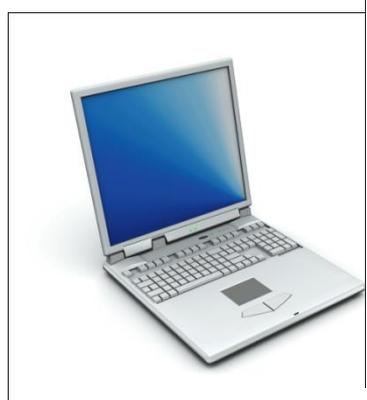


純仕入高 = 総仕入高 - 仕入戻し高 - 値引高

純仕入高 = 60,000 - 2,000 - 8,000 = 50,000

仕入れたノートパソコン
¥100,000 × 4台 = 400,000

品違いのため1台返品
¥100,000



仕入

総仕入高

400,000 | 100,000

仕入戻し高

純仕入高 300,000

総売上高と純仕入高

売上		
売上戻り高	3,000	80,000
売上返品高	7,000	

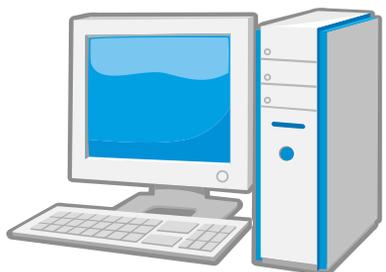
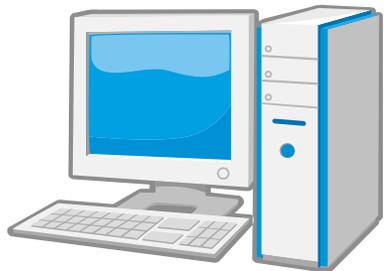
総売上高

純売上高 = 総売上高 - 売上戻り高 - 値引き高

純売上高 = 80,000 - 3,000 - 7,000 = 70,000

売れたノートパソコン
¥100,000 × 4台 = 400,000

品違いのため1台返品される
¥100,000



売上

売上戻り高

100,000

400,000

総売上高

純売上高 300,000

3分法で商品売買におけるもう
けはどうやって計算する？

売り上げた金額から仕入れた金額
をひけばいいんじゃないの？



これってどこか間違っていない？

仕入れたすべての商品が売れるわけではない。前期から残ってきた商品もあるし、次期に残っていく商品もあるよね？

そこで**売上原価**（一会計期間に販売された商品の原価）を求めることで明らかにする。

繰越商品

10,000

仕入

60,000

2,000

8,000

倉庫の商品
15,000

売上原価 = 期首商品棚卸高 + 純仕入高 - 期末商品棚卸高

売上原価 = 10,000 + 50,000 - 15,000 = 45,000

売上原価の求め方。

会計期間1月1日～12月31日
@100円

1月1日に倉庫にあるコーラ



当期に仕入れたコーラ



12月31日に倉庫にあるコーラ



200

+

400

-

100

(期首商品棚卸高)

(純仕入高)

(期末商品棚卸高)

売上原価 500

2 商品売買益の計算

- 3分法での商品売買益の計算は次の式によって求める。

$$\text{純売上高} - \text{売上原価} = \text{商品売買益}$$

(マイナスのときは商品売買損)

売上原価・・・会計期間に販売された商品の原価をいう。

$$\text{期首商品棚卸高} + \text{純仕入高} - \text{期首商品棚卸高} = \text{売上原価}$$

期首商品棚卸高¥6,500 純仕入高¥ 97,000

期末商品棚卸高¥7,300 純売上高¥138,000

この資料から売上原価と商品売買益を求めなさい。

売上原価

$$6,500 + 97,000 - 7,300 = 96,200$$

期首商品棚卸高 純仕入高 期末商品棚卸高

商品売買益

$$138,000 - 96,200 = 41,800$$

純売上高 売上原価

3 仕入帳と売上帳

- 商品売買の取引の明細を記録する**補助簿**として、仕入帳と売上帳が用いられる。

1 仕入帳

- 仕入取引の明細を発生順に記録する補助簿

仕入帳

平成 ○年	摘要	内訳	金額
9	10 館山商店 掛け		
	A 品 200個 @ ¥ 500 B 品 300 " " " 1,000	100,000 300,000	400,000
11	富浦商店 掛け		
	B 品 160個 @ ¥ 1,000 引取運賃現金払い	160,000 6,400	166,400
23	富浦商店 掛け値引き B 品 160個 @ ¥ 30		4,800
30			566,400
"			4,800
			561,600

仕入帳

平成 〇年	摘要	内訳	金額
9	10 館山商店		
	A 品 200個 @ ¥ 500 B 品 300〃 // // 1,000	400,000 0,000	400,000
11	富浦商店		
	B 品 160個 @ ¥ 1,000 引取運賃現金払い	160,000 6,400	166,400
23	富浦商店		
	B 品 160個 @ ¥ 30		4,800
30		合計線	566,400
〃			4,800
		締切線	561,600

要
 日付の仕切り線

内訳の合計線

掛け値引き
 総仕入高
 仕入値引高
 純仕入高

締切線

合計線

締切線

売上帳

平成 〇年		摘 要	内 訳	金 額
9	14	野田商店 現金・掛け A 品 200個 @ ¥ 800		160,000
	15	野田商店 掛け戻り A 品 20個 @ ¥ 800		16,000
	25	佐倉商店 掛け A 品 300個 @ ¥ 800 B 品 200 " " " 1,400		240,000
				280,000
	30 "		総売上高 売上戻り高 純売上高	680,000 16,000 664,000

9月 1日 松戸商店から、次の商品を仕入れ、代金は掛けとした。

A品	100個	@ ¥1,500	¥150,000
B品	80 //	// // 1,000	¥ 80,000

(借) 仕入 230,000 (貸) 買掛金 230,000

仕入

9/1 買掛金 230,000

売上

9月 2日 松戸商店から仕入れた上記商品のうち、A品10個が品質不良であったので返品した。なお、この代金は買掛金から差し引くことにした。

(借) 買掛金 15,000 (貸) 仕入 15,000

仕入

9/1 買掛金 230,000 | 9/2 買掛金 15,000

売上

9月 5日 土浦商店に次の商品売り渡し、代金のうち、
¥50,000は同店振り出しの小切手で受け取り、ただちに当座
預金に預け入れ、残額は掛けとした。

A品 70個 @ ¥1,800 ¥126,000

(借) 当座預金 50,000 (貸) 売上 126,000
売掛金 76,000

仕入

9/1 買掛金 230,000 | 9/2 買掛金 15,000

売上

9/5 諸口 126,000

9月 7日 土浦商店に売り渡した上記商品のうち、10個が色違いのため返品を受けた。なお、この代金は売掛金から差し引くことにした。

(借) 売上 18,000 (貸) 売掛金 18,000

仕入

9/1 買掛金 230,000 | 9/2 買掛金 15,000

売上

9/7 売掛金 18,000 | 9/5 諸口 126,000

9月12日 北浦商店に次の商品を売り渡し、代金は現金で受け取った。

A品	60個	@ ¥1,900	¥114,000
B品	50 "	" " 1,200	¥ 60,000

(借) 現金 174,000 (貸) 売上 174,000

仕入

9/1 買掛金 230,000 | 9/2 買掛金 15,000

売上

9/7 売掛金18,000 | 9/5 諸口126,000
12 現金174,000

9月13日 北浦商店に売り渡した上記商品について、次のとおり値引きした。なお、この代金は現金で返金した。

B品 30 // @ ¥100 ¥ 3,000

(借) 売上 3,000 (貸) 現金 3,000

仕入

9/1 買掛金 230,000 | 9/2 買掛金 15,000

売上

9/7 売掛金18,000 | 9/5 諸口126,000
13 現金174,000 | 12 現金174,000

9月20日 野田商店から、次の商品を仕入れ、代金のうち
 ¥40,000は小切手を振り出して支払い、残額は掛けとした。

A品 150個 @ ¥1,600 ¥240,000

(借) 仕入 240,000 (貸) 当座預金 40,000
 売掛金 200,000

仕入

9/1 買掛金 230,000	9/2 買掛金 15,000
20 諸口 240,000	

売上

9/7 売掛金 18,000	9/5 諸口 126,000
13 現金 3,000	12 現金 174,000

仕入帳

平成 ○年	摘要	内訳	金額
9	1 松戸商店 掛け A 品 100個 @ ¥1,500 B 品 80 " " " 1,000	150,000 80,000	230,000
	2 松戸商店 掛け戻し A 品 10個 @ ¥1,500		15,000
	20 野田商店 小切手・掛け A 品 150個 @ ¥1,600		240,000
	30 " 総仕入高 仕入戻し高 純仕入高		470,000 15,000 455,000

4 商品有高帳

- 商品の受け入れ、払い出しおよび残高の明細を記録する補助簿。
- 商品の種類ごとに口座を設ける。
- 同一種類の商品でも、仕入単価が異なる場合には、払出金額と残高金額を計算する上でどのような払出単価を用いるか決めなければならない。
- 先入先出し法、移動平均法**を学習する。

1 先入先出法

- 先に受け入れた単価の分を先に払出す方法

2 移動平均法

- 仕入れのつど、残高欄の金額と仕入金額を合計し、その合計額を残高数量と仕入数量の合計数量で割って、新しい平均単価を計算し、これを払出単価とする方法。

商品有高帳

(先入先出法)

A 品

単位 個

平成 ○年		摘 要	受 入			引 渡			残 高			
			数量	単価	金額	数量	単価	金額	数量	単価	金額	
1	1	前月繰越	300	200	60,000				300	200	60,000	
	8	取手商店				200	200	40,000	100	200	20,000	
	10	柏商店	400	220	88,000				[100	200	20,000
										400	220	88,000
	18	市川商店				[100	200	20,000			
							200	220	44,000	200	220	44,000
	25	浦安商店	200	230	46,000				[200	220	44,000
								200		230	46,000	
31	次月繰越				[200	220	44,000				
						200	230	46,000				
			900		194,000	900		194,000				

商品有高帳

(先入先出法)

A 品

単位 個

平成 ○年	摘要	受 入			引 渡			残 高				
		数量	単価	金額	数量	単価	金額	数量	単価	金額		
9	1	前月繰越	2,600	180	468,000				2,600	180	468,000	
	4	笠間商店				2,000	180	360,000	600	180	108,000	
	10	市原商店	500	200	100,000				[600	180	108,000
	12	佐倉商店				[600	180		108,000	500	200
							400	200	80,000	100	200	20,000
	25	佐倉商店	700	210	147,000				[100	200	20,000
										700	210	146,000
31	次月繰越				[100	200	20,000				
						700	210	146,000				
			3,800		715,000	3,800		715,000				

商品有高帳

(移動平均法)

A 品

単位 個

平成 ○年		摘 要	受 入			引 渡			残 高		
			数量	単価	金額	数量	単価	金額	数量	単価	金額
10	1	前月繰越	200	500	100,000				200	500	100,000
	9	松山商店	800	550	440,000				1,000	540	540,000
	16	室戸商店				250	540	135,000	750	540	405,000
	22	香川商店	250	560	140,000				1,000	545	545,000
	29	高知商店				410	545	223,450	590	545	321,550
	31	次月繰越				590	545	321,550			
			1,250		680,000	1,250		680,000			
11	1	前月繰越	590	545	321,550				590	545	321,550

商品有高帳

(移動平均法)

ボールペン

単位 ダース

平成 ○年	摘要	受 入			引 渡			残 高			
		数量	単価	金額	数量	単価	金額	数量	単価	金額	
8	1	前月繰越	150	800	120,000				150	800	120,000
	7	愛媛商店	200	730	446,000				350	760	266,000
	12	鳴門商店				125	760	95,000	225	760	171,000
	20	徳島商店	300	690	207,000				525	720	378,000
	25	宇和島商店				250	720	180,000	275	720	198,000
	31	次月繰越				275	720	198,000			
			650		473,000	650		473,000			
9	1	前月繰越	275	720	198,000				275	720	198,000

第10章 掛け取引の記帳

売掛金元帳

日光商店

1

平成 ○年		摘 要	借方	貸方	借または貸	残 高
1	1	前月繰越	100,000		借	100,000
	6	売り上げ	70,000		//	170,000
	7	売上値引き		4,000	//	166,000
	15	現金受け取り		85,000	//	81,000
	31	次月繰越		81,000		
			170,000	170,000		

今市商店

平成 ○年		摘 要	借方	貸方	借または貸	残 高
1	1	前月繰越	70,000		借	70,000
	17	売り上げ	25,000		//	95,000
	24	売上戻り		8,000	//	87,000
	31	次月繰越		87,000		
			95,000	95,000		

夏休み以降

第11章 固定資産の記帳

1 固定資産の取得

企業が所有する備品・車両運搬具・建物・土地などのように、一般に1年を超えて、営業活動のために使用する資産を固定資産という。

固定資産を取得したとき、それらの勘定(備品・車両運搬具・建物・土地)の借方に取得原価を記入する。

$$\text{取得原価} = \text{買入価額} + \text{付随費用}$$

固定資産と流動資産

売掛金・商品などのように比較的短期間に現金になる資産及び現金や当座預金を流動資産という。

備品と消耗品

1年以上使用可能で、一定金額以上（税法では10万以上）のものを備品勘定で処理する。

2 固定資産の売却

固定資産が不要になると、売却することがある。

その場合、固定資産勘定の貸方に帳簿価額で記入し、売却価額より**高い**場合は、**固定資産売却益**勘定（収益）の貸方に記入する。

売却価額が帳簿価額より**低い**場合には、その差額を**固定資産売却損**（費用）の借方に記入する。

3 固定資産台帳

固定資産の明細を記録するために、補助簿として建物台帳・備品台帳・土地台帳などの固定資産台帳が用いられる。

第12章 決算(その1)

1 決算整理と棚卸表

各勘定は、決算日の実際有高やその期間の収益・費用の額を正しく表していなければならない。

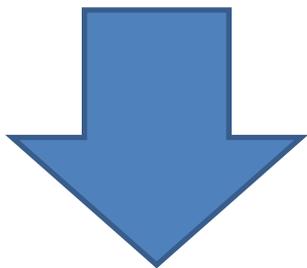


しかし

日々の取引を記帳しただけでは、正しい期末有高をあらわしていないことがある。

1 決算整理と棚卸表

そこで、決算にあたり、各勘定が正しい実際有高や収益・費用の額を示すように**帳簿記録を修正・整理**する必要がある。



この手続きを**決算整理**という。
そのために必要な仕訳を**整理仕訳**または**決算整理仕訳**という。

決算整理を必要とする事項

- 3分法による商品売買損益計算のための**売上原価**の計算。
- **貸し倒れ**の見積もり
- 固定資産の**減価償却**

1 売上原価の計算

売上原価 = 期首商品棚卸高 + 純仕入高 - 期末商品棚卸高

売上原価の求め方。

会計期間1月1日～12月31日
@100円

1月1日に倉庫にあるコーラ



当期に仕入れたコーラ



12月31日に倉庫にあるコーラ



$$200 + 400 - 100$$

(期首商品棚卸高)

(純仕入高)

(期末商品棚卸高)

売上原価 500

仕入れたすべての商品が売れるわけではない。前期から残ってきた商品もあるし、次期に残っていく商品もあるよね？

そこで**売上原価**（一会計期間に販売された商品の原価）を求めることで明らかにする。

繰越商品

10,000

仕入

60,000

2,000

8,000

倉庫の商品
15,000

売上原価 = 期首商品棚卸高 + 純仕入高 - 期末商品棚卸高

売上原価 = 10,000 + 50,000 - 15,000 = 45,000

第12章 三分法の整理

問題集P97

次の空欄の金額を計算しなさい。

	期首商品棚卸高	純仕入高	期末商品棚卸高	売上原価	純売上高	商品売買益
(1)	65,000	308,000	58,000	315,000	416,000	101,000
(2)	71,000	445,000	83,000	433,000	495,000	62,000
(3)	119,000	652,000	134,000	637,000	774,000	137,000

売上原価の計算を思い出そう(リンク)

売上原価 = 期首商品棚卸高 + 純仕入高 - 期末商品棚卸高

次の整理仕訳を仕入勘定に記入し、振替仕訳を行い、仕入勘定を締め切りなさい。

12/31 (借)仕 入 85,000 (貸)繰越商品 85,000
 " (借)繰越商品 93,000 (貸)仕 入 93,000

12/31 (借)損 益 546,000 (貸)仕 入 546,000

仕入

(純仕入高)	554,000	12/31	繰越商品	93,000
12/31 前期繰越	85,000	"	損 益	546,000
	<u>639,000</u>			<u>639,000</u>

次の決算のさいにおこなわれた4つの仕訳を、下記の勘定に記入して締め切りなさい。勘定には、仕訳の番号・相手科目・金額を記入しなさい。

①(借)	仕入	235,000	(貸)	繰越商品	235,000
②(借)	繰越商品	264,000	(貸)	仕入	264,000
③(借)	売上	1,283,000	(貸)	損益	1,283,000
④(借)	損益	823,000	(貸)	仕入	823,000

繰越商品

1/1 前期繰越	235,000	①仕入	235,000
②仕入	<u>264,000</u>	次期繰越	<u>264,000</u>
	<u>499,000</u>		<u>499,000</u>
1/1 前期繰越	264,000		

仕入

(総仕入高)	873,000	(仕入戻し高)	21,000
①繰越商品	235,000	②繰越商品	264,000
	<u>1,108,000</u>	④損益	<u>823,000</u>
			<u>1,108,000</u>

売上

(売上戻り高)	33,000	(総売上高)	1,316,000
③損益	<u>1,283,000</u>		<u>1,316,000</u>
	<u>1,316,000</u>		

損益

④仕入	823,000	③売上	1,283,000
-----	---------	-----	-----------

次の決算整理仕訳をおこない、繰越商品勘定に記入して締め切りなさい。決算日は12月31日、期末商品棚卸高は¥207,000である。

借 方		貸 方	
仕 入	183,000	繰越商品	183,000
繰越商品	207,000	仕 入	207,000

繰越商品

1/1	前期繰越	183,000	12/31	仕 入	183,000
12/31	仕 入	<u>207,000</u>	"	次期繰越	<u>207,000</u>
		<u>390,000</u>			<u>390,000</u>
1/1	前期繰越	207,000			

第12章 貸し倒れの見積もり

問題集P100

2 貸し倒れの見積もり (差額補充法)

売掛金の期末残高に貸し倒れが予想される場合、決算にあたり、その貸し倒れの見積額を貸倒引当金繰入勘定(費用)の借方に繰り入れる。(貸倒償却を用いることもある)

しかしまだ貸倒が発生したわけではないから、売掛金を減少させることができない。

2 貸し倒れの見積もり (差額補充法)

そこで、別に**貸倒引当金**勘定(評価勘定)を設けて、この勘定の貸方に貸し倒れの見積額を記入する。そして、売掛金の期末残高から貸倒引当金の残高を差し引いた金額が次期に回収できると予想される金額を示すことになる。

2 貸し倒れの見積もり (差額補充法)

例2

12月31日 第1期の決算にあたり、売掛金
残高¥400,000に対して、2%の貸し倒れを
見積もった。

計算の方法

$$400,000 \times 0.02 = 8,000$$

仕訳 貸倒償却でもよい

貸倒引当金繰入 8,000 貸倒引当金 8,000

2 貸し倒れの見積もり (差額補充法)

12月31日 貸倒引当金繰入勘定の残高
¥8,000を損益勘定へ振り替えた。

仕訳				
損	益	8,000	貸倒引当金繰入	8,000

貸倒償却でもよい

2 貸し倒れの見積もり (差額補充法)

6月20日 得意先の北東商店が倒産したため、同店に対する売掛金 ¥6,000 が貸し倒れになった。ただし、貸倒引当金勘定の残高が ¥8,000 ある。

仕訳

貸倒引当金	6,000	売掛金	6,000
-------	-------	-----	-------

2 貸し倒れの見積もり (差額補充法)

12月31日 第2期の決算にあたり、売掛金残高
¥450,000に対して、2%の貸し倒れを見積もった。
ただし、貸倒引当金勘定の残高が¥2,000ある。

計算の方法

$$450,000 \times 0.02 = 9,000$$

$$9,000 - 2,000 = 7,000$$

仕訳

貸倒引当金繰入7,000 貸倒引当金7,000

2 貸し倒れの見積もり (差額補充法)

7月25日 得意先の東南商店が倒産したため、同店に対する売掛金¥10,000が貸し倒れとなった。ただし、貸倒引当金勘定の残高が¥9,000ある。

貸倒引当金以上の貸倒が発生した場合。

計算の方法

$$10,000 - 9,000 = 1,000$$

仕訳

貸倒引当金 9,000 売掛金 10,000

貸倒損失 1,000

24-1

決算にあたり、売掛金残高 ¥280,000 に対して、5%の貸倒引当金を設けた場合の整理仕訳(修正仕訳)を示しなさい。

$$280,000 \times 5\% = 14,000$$

(借) 貸倒償却 14,000 (貸) 貸倒引当金14,000

24-2

決算にあたり、売掛金残高 ¥ 540,000 に対して5%の貸倒引当金を設けた。決算日は12月31日である。

(1) 貸倒引当金に残高がない場合

$$54,000 \times 5\% = 27,000$$

(借) 貸倒償却 27,000 (貸) 貸倒引当金 27,000

貸倒償却

12/31	貸倒引当金	<u>27,000</u>	12/31	損	<u>益</u> 27,000
-------	-------	---------------	-------	---	-----------------

貸倒引当金

12/31	次期繰越	<u>27,000</u>	12/31	貸倒償却	<u>27,000</u>
-------	------	---------------	-------	------	---------------

決算にあたり、売掛金残高 ¥540,000 に対して5%の貸倒引当金を設けた。決算日は12月31日である。

(2) 貸倒引当金に¥8,000の残高がある場合

$$54,000 \times 5\% = 27,000$$

$$27,000 - 8,000 = 19,000$$

(借) 貸倒償却 19,000 (貸) 貸倒引当金 19,000

貸倒償却

12/31 貸倒引当金 <u>19,000</u>	12/31 損	益 <u>19,000</u>
---------------------------	---------	-----------------

貸倒引当金

12/31 次期繰越 27,000	1/1 前期繰越 8,000
<u>27,000</u>	12/31 貸倒償却 19,000
	<u>27,000</u>

24-3

大津商店が倒産し、同店に対する売掛金¥75,000が回収不能となった。ただし、貸倒引当金勘定の残高が¥58,000ある。

(借)	貸倒引当金	58,000	(貸)	売掛金	75,000
	貸倒償却	17,000			

次の連続した取引の仕訳を示し、貸倒引当金勘定に記入しなさい。(差額を計上する方法による。)

12月31日 決算にあたり、売掛金勘定残高¥864,000
に対し、5%の貸倒引当金を設けた。

(借) 貸倒償却43,200 (貸) 貸倒引当金 75,000

3月10日 前期からくり超された神戸商店に対する売
掛金¥35,000が回収不能となった。

(借) 貸倒引当金35,000 (貸) 売掛金 35,000

12月31日 決算にあたり、貸倒引当金を売掛金勘定
残高¥1,250,000の5%とする。

(借) 貸倒償却54,300 (貸) 売掛金 54,300

第12章 減価償却(直接法)

問題集P102

減価償却

- 備品・建物などの固定資産は、次第に価値が減少していくので、その価値の減少額を見積もり、これを当期の費用として計上する。
- また固定資産の金額をその額だけ減少させる。
- この手続きを減価償却という。

25-1 減価償却(直接法)

次の備品の減価償却費を定額法によって計算しなさい。

取得原価 ¥200,000

残存価額は取得原価の10%

耐用年数 8年

決算 年1回

$$\frac{200,000 - 20,000}{8\text{年}} = \text{減価償却費 } 22,500$$

25-2

次の決算整理仕訳を行い、下記の勘定に記入して締め切りなさい。(直接法によること)
備品の減価償却費を定額法によって計上した。

備品の取得原価	¥300,000
残存価額は取得原価の	10%
耐用年数	10年
決算日	12月31日

$$\frac{300,000 - 30,000}{10\text{年}} = \text{減価償却費 } 27,000$$

(借) 減価償却費 27,000 (貸) 備品 27,000

25-3

次の決算整理仕訳を行い、備品勘定に記入して締め切りなさい。(直接法によること)

備品の減価償却費を定額法によって計上した。

備品の取得原価	¥400,000
残存価額は取得原価の	0
耐用年数	8年
決算日	12月31日

$$\frac{400,000 - 0}{8\text{年}} = \text{減価償却費 } 50,000$$

(借) 減価償却費 50,000 (貸) 備品 50,000

次の決算によって、決算仕訳を示し、下記の勘定に記入して締め切りなさい。

決算整理事項 建物減価償却高 ¥30,000(直接法)

	借方	貸方
整理仕訳	減価償却費 30,000	建物 30,000
振替仕訳	損 益 30,000	減価償却費 30,000

減価償却費

12/31 建物 30,000 12/31 損益 30,000

建物

1/1 次期繰越	1,320,000	12/31 減価償却費	30,000
		// 次期繰越	<u>1,290,000</u>
	<u>1,320,000</u>		<u>1,320,000</u>

次の連続した取引の仕訳を示し、備品勘定に記入して締め切りなさい。

12/31 減価償却費を定額法で計算し、直接法で記帳した。(残存価額は取得原価の10% 耐用年数12年)

	借方	貸方
12/31	減価償却費 31,500	備品 31,500
12/31	減価償却費 31,500	備品 31,500

備品

1/12 当座預金 420,000

420,000

1/1 前期繰越 388,500

388,500

1/1 前期繰越 357,000

12/31 減価償却費 31,500

// 次期繰越 388,500
420,000

12/31 減価償却費 31,500

// 次期繰越 357,000
388,500

第12章 8桁精算表

問題集P105

精算表

- 6桁精算表に「整理記入」欄を設けた精算表。
- 8桁精算表の作り方
- ①残高試算表欄に勘定残高を記入。
- ②決算整理事項を整理記入欄に記入。
- ③残高試算表の金額と整理事項を加減し、損益計算書・貸借対照表に記入する。
- ④損益計算書・貸借対照表の金額をそれぞれ合計し、その差額を当期純利益または純損失として記入する。

次の決算整理事項によって、精算表を完成しなさい。

決算整理事項

- a. 期末商品棚卸高 ￥853,000
- b. 貸倒引当金 売掛金残高の5%とする。
(差額を計上する方法)
- c. 備品減価償却高 取得原価 ￥320,000
(残存価額は取得原価の10%・耐用年数8年・定額法)
直接法によって記帳している。
- d. 現金過不足勘定の ￥2,000は雑益とする。
- e. 引出金勘定は整理する。

次の決算整理事項によって、精算表を完成しなさい。

決算整理事項

a. 期末商品棚卸高 ￥853,000

仕入 819,000 繰越商品 819,000

繰越商品 853,000 仕入 853,000

次の決算整理事項によって、精算表を完成しなさい。

決算整理事項

- b. 貸倒引当金 売掛金残高の5%とする。
(差額を計上する方法)

売掛金残高が 1,260,000

貸倒引当金に残高が14,000あるので、

新に設定する貸倒引当金は

$$1,260,000 \times 5\% - 14,000 = 49,000$$

貸倒償却 49,000 貸倒引当金 49,000

次の決算整理事項によって、精算表を完成しなさい。

決算整理事項

- c. 備品減価償却高 取得原価 ¥ 320, 000
(残存価額は取得原価の10%・耐用年数8年・定額法)
直接法によって記帳している。

$$\frac{320,000 - 32,000}{8\text{年}} = \text{減価償却費 } 36,000$$

(借) 減価償却費 36,000 (貸) 備 品 36,000

次の決算整理事項によって、精算表を完成しなさい。

決算整理事項

d. 現金過不足勘定の¥2,000は雑益とする。

現金過不足

雑益

2,000 | 2,000  | 2,000

(借) 現金過不足 2,000 (貸) 雑益 2,000

次の決算整理事項によって、精算表を完成しなさい。

決算整理事項

e. 引出金勘定は整理する。

引出金

資本金

150,000

150,000

150,000

1,800,000

(借) 資本金

150,000

(貸) 引出金

150,000

精 算 表

平成〇年12月31日

勘定科目	残高試算表		整理記入		損益計算書		貸借対照表	
	借方	貸方	借方	貸方	借方	貸方	借方	貸方
現金	144,000							
当座預金	638,000							
売掛金	1,260,000							
貸倒引当金		14,000		49,000				
			853,000	819,000				
				36,000				
借入金		300,000						
資本		1,800,000	150,000					
引出金	150,000			150,000				
売上		2,579,000						
受取手数料		15,000						
仕入	1,845,000		819,000	853,000				
給料	230,000							
発送費	72,000							
広告料	50,000							

整理仕訳を
記入する。

資本金		1,800,000	150,000				
引出金	150,000			150,000			
売上		2,579,000					
受取手数料		15,000					
仕入	1,845,000		819,000	853,000			
給料	230,000						
発送費	72,000						
広告料	50,000						
支払家賃	120,000						
消耗品費	37,000						
雑費	28,000						
支払利息	17,000						
現金過不足		2,000	2,000				
	5,694,000	5,694,000					
(貸倒償却)			49,000				
(減価償却)			36,000				
(雑益)				2,000			
(当期純利益)			1,909,000	1,909,000			

合計一致！

精 算 表

平成〇年12月31日

勘定科目	残高試算表		整理記入		損益計算書		貸借対照表	
	借方	貸方	借方	貸方	借方	貸方	借方	貸方
現金	144,000						144,000	
当座預金	638,000						638,000	
売掛金	1,260,000						1,260,000	
貸倒引当金		14,000		49,000				63,000
繰越商品	819,000		853,000	819,000			853,000	
備品	284,000			36,000			248,000	
買掛金		984,000						984,000
借入金		300,000						300,000
資本金		1,800,000	150,000					1,650,000
引出金	150,000			150,000				
売上		2,579,000				2,579,000		
受取手数料		15,000				15,000		
仕入	1,845,000		819,000	853,000				
給料	230,000							
発送費	72,000							
広告料	50,000							

資産・負債・資本は貸借対照表に

費用・収益は損益計算書に

資本金		1,800,000	150,000				
引出金	150,000			150,000			
売上		2,579,000				2,579,000	
受取手数料		15,000				15,000	
仕給							
発行							
応支							
消費							
雑支							
現金過不足		2,000	2,000				
	5,694,000	5,694,000					
(貸倒償却)			49,000		49,000		
(減価償却)			36,000		6,000		
(雑益)				2,000		2,000	
(当期純利益)					146,000		146,000
			1,909,000	1,909,000	2,596,000	2,596,000	3,143,000
							3,143,000

当期純利益または
純損失を計算し、記入する。

146,000

第13章 手形取引の記帳

1 手形の種類

- 商品の仕入代金を支払ったり、売上代金を回収するための手段として、現金や小切手などのほか、**手形**が用いられる。
- 手形には**約束手形(約手)**と**為替手形(為手)**がある。
- 簿記上で重要なことは手形の種類ではなく、手形債権・手形債務の有無である。

1 手形の種類

•約束手形

手形の振出人が名あて人に対して、一定の期日に一定の金額を支払うことを**約束**する証券。

支払うのは→振出人

•為替手形

手形の振出人が名あて人に対して、一定の期日に手形金額を受取人に支払うことを**依頼**する証券。

支払うのは→名あて人

2 約束手形の記帳

11月1日 岡山商店は高松商店から商品 ¥180,000を仕入れ、代金は、高松商店あて約束手形 #5 ¥180,000 (振出日11月1日、支払期日12月10日、支払場所全日本銀行京橋支店)を振り出して支払った。

岡山商店

(借)仕 入180,000 (貸)支払手形 180,000

12月10日 岡山商店は高松商店あての約束手形 #5 ¥180,000を、期日に当店の当座預金から支払ったむね、取引銀行から通知を受けた。

岡山商店

(借)支払手形180,000 (貸)当座預金 180,000

高松商店から仕訳すると

11月1日 岡山商店は高松商店から商品 ¥180,000を仕入れ、代金は、高松商店あて約束手形#5¥180,000(振出日11月1日、支払期日12月10日、支払場所全日本銀行京橋支店)を振り出して支払った。

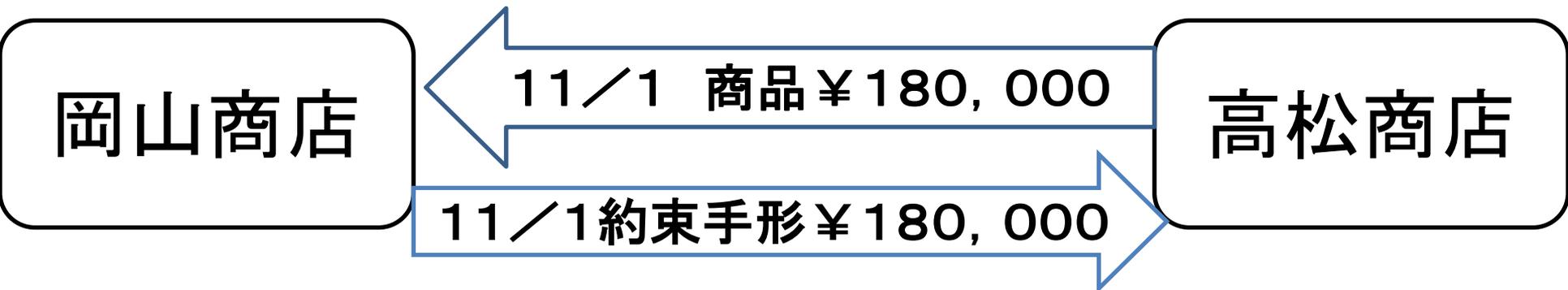
高松商店

(借)受取手形180,000(貸)売 上 180,000

12月10日 岡山商店は高松商店あての約束手形#5 ¥180,000を、期日に当店の当座預金から支払ったむね、取引銀行から通知を受けた。

高松商店

(借)当座預金180,000(貸)受取手形 180,000



岡山商店

(借)仕 入180,000 (貸)支払手形 180,000

高松商店

(借)受取手形180,000 (貸)売 上 180,000

岡山商店

11/1 商品 ¥180,000

11/1 約束手形 ¥180,000

12/10 手形代金の支払い

高松商店

12/10の仕訳

岡山商店

(借) 支払手形 180,000 (貸) 当座預金 180,000

高松商店

(借) 当座預金 180,000 (貸) 受取手形 180,000

(1) 青山商店に商品¥210,000を売り渡し、代金は同店振り出しの約束手形を受け取った。

(借) 受取手形210,000 (貸) 売 上210,000

(2) 渋谷商店に対する買掛金¥90,000を支払うため、約束手形を振り出して支払った。

(借) 買掛金90,000 (貸) 支払手形90,000

(3)かねて、取引銀行に取り立てを依頼していた
約束手形¥120,000が、本日満期となり、当店の
当座預金に入金されたむねの通知を受けた。

(借) 当座預金120,000 (貸) 受取手形120,000

(4) さきに大山商店に振り出していた約束手形
¥240,000が、本日満期となり、当座預金から支
払った。

(借) 支払手形240,000 (貸) 当座預金240,000

3 為替手形の記帳

11月2日 岡山商店は広島商店から商品 ¥250,000を仕入れ、その代金の支払いのために、売掛金のある得意先松山商店あてに為替手形 #2 ¥250,000 (振出日11月2日、支払期日12月12日、支払場所新日本銀行新宿支店)を振り出し、松山商店の引き受けを得て、広島商店に渡した。

岡山商店(振出人)

(借)仕 入250,000 (貸)売 掛 金250,000

松山商店(名あて人=支払人)

(借)買 掛 金250,000 (貸)支払手形250,000

広島商店(受取人)

(借)受取手形250,000 (貸)売 上250,000

12月12日 松山商店は、さきに引き受けをした岡山商店振り出し、広島商店受取の為替手形#2¥250,000が期日に当座預金から支払われたむね、取引銀行から通知を受けた。

松山商店(名あて人=支払人)

(借) 支払手形250,000 (貸) 当座預金250,000

12月12日 広島商店は、かねて取り立てを依頼していた岡山商店振り出しの為替手形#¥250,000が期日に当座預金に入金したむね、取引銀行から通知を受けた。

広島商店(名あて人=受取人)

(借) 当座預金250,000 (貸) 受取手形250,000

徳島商店は、高知商店から商品¥550,000を仕入れ、代金は売掛金のある得意先広島商店あての為替手形¥550,000を振り出し、広島商店の引き受けを得て、高知商店に渡した。この取引の各商店の仕訳を答えなさい。

徳島商店

広島商店

高知商店

(借) 支払手形240,000 (貸) 当座預金240,000

4 手形の裏書

- 約束手形や為替手形の所持人は、その手形を支払い期日前に、商品代金の支払いなどのために、他人に譲り渡すことができる。
- この場合、手形の裏面(りめん)に必要な事項を記入し、署名または記名・押印をする。これを手形の裏書譲渡という。
- この手形の裏書きをした人を裏書人といい、裏書きされた手形を受け取る人を被裏書人という。

11月23日 岡山商店は、山口商店から商品¥160,000を仕入れ、代金のうち¥140,000については、さきに商品売り渡しの日に受け取った、島根商店振り出しの約束手形#19¥140,000(振出日11月19日、支払い期日12月20日、支払場所 新日本銀行米子支店)を裏書譲渡し、残額は掛けとした。

岡山商店

(借)仕 入160,000 (貸)受取手形140,000
買 掛 金 20,000

山口商店

(借)受取手形140,000 (貸)売 上160,000
売 掛 金 20,000

4 手形の割引

- 手形の所持人は、営業に必要な資金を調達するために、支払期日前に、その手形を取引銀行などに裏書き譲渡することがある。これを手形の割引という。
- この場合、割り引いた日から支払期日までの利息などに相当する割引料を差し引いた残額を手取金として当座預金勘定の借方に記入する。

手形の割引も相手方へ手形を売却したことになり。手取金と手形金額は手形売却損勘定で処理する。

- 受取手形も不渡りとなり、回収不能となることもあるので、売掛金同様、期末に貸倒引当金を見積もる。

11月26日 岡山商店は、さきに売掛金の回収として受け取った、福山商店振り出しの約束手形#11¥200,000(振出日11月15日、支払い期日12月25日、支払場所 瀬戸銀行倉敷支店)を取引銀行に売却し、割引料などを差し引かれ、手取金¥198,000は当座預金に預け入れた。

岡山商店

(借)当座預金198,000 (貸)受取手形200,000
手形売却損 2,000

5 受取手形記入帳と支払手形記入帳

- 手形債権と手形債務の発生・消滅に就いての明細を記録するための補助簿。

受取手形記入帳

10月6日 目白商店から売掛金¥160,000を、同店振り出しの次の約束手形で受け取った。
 (目白商店振り出し、当店あて約束手形#26 ¥160,000
 振出日10月6日、支払期日11月6日、支払場所全商銀行)

受取手形記入帳

平成 ○年	摘要	金額	手形 種類	手形 番号	支払人	振出人 または 裏書人	振出 日		支払 期日		支払場所	てん末			
							月	日	月	日		月	日	摘要	
10	6	掛け代金	160,000	約手	26	目白商店	目白商店	10	6	11	6	全商銀行			

受取手形記入帳

10月12日 池袋商店に商品¥230,000を売り渡し、代金として同店振り出し、大塚商店あて(引受済み)の次の為替手形を受け取った。
 (振出日10月12日、支払期日11月12日、支払場所全商銀行)

受取手形記入帳

平成 ○年	摘要	金額	手形 種類	手形 番号	支払人	振出人 または 裏書人	振出 日		支払 期日		支払場所	てん末			
							月	日	月	日		月	日	摘要	
10	6	掛け代金	160,000	約手	26	目白商店	目白商店	10	6	11	6	全商銀行			
	12	売上代金	230,000	為手	6	大塚商店	池袋商店	10	12	11	12	全商銀行			

受取手形記入帳

10月15日 赤羽商店から商品¥160,000を仕入れ、代金として6日に目白商店から受け取っていた約束手形、#26を裏書譲渡した。

受取手形記入帳

平成 ○年	摘要	金額	手形 種類	手形 番号	支払人	振出人 または 裏書人	振出 日		支払 期日		支払場所	てん末			
							月	日	月	日		月	日	摘要	
10	6	掛け代金	160,000	約手	26	目白商店	目白商店	10	6	11	6	全商銀行	10	15	裏書譲渡
	12	売上代金	230,000	為手	6	大塚商店	池袋商店	10	12	11	12	全商銀行			

受取手形記入帳

10月20日 落合商店に商品¥270,000を売り渡し、代金のうち¥200,000は同店振り出しの次の約束手形で受取り、残額は現金で受け取った。
 (落合商店振り出し, 当店当て約束手形#19 ¥200,000
 振出日10月20日、支払期日12月20日、支払場所全商銀行

受取手形記入帳

平成 ○年	摘要	金額	手形 種類	手形 番号	支払人	振出人 または 裏書人	振出 日		支払 期日		支払場所	てん末			
							月	日	月	日		月	日	摘要	
10	6	掛け代金	160,000	約手	26	目白商店	目白商店	10	6	11	6	全商銀行	10	15	裏書譲渡
	12	売上代金	230,000	為手	6	大塚商店	池袋商店	10	12	11	12	〃			
	20	〃	200,000	約手	19	落合商店	落合商店	10	20	12	20	〃			

受取手形記入帳

11月12日 先月12日に受け取り、取り立てを依頼していた池袋商店振り出し、大塚商店引受済みの為替手形#6が本日満期となり、当店の当座預金に入金したむねの通知を取引銀行から受けた。

受取手形記入帳

平成 ○年	摘要	金額	手形 種類	手形 番号	支払人	振出人 または 裏書人	振出 日		支払 期日		支払場所	てん末			
							月	日	月	日		月	日	摘要	
10	6	掛け代金	160,000	約手	26	目白商店	目白商店	10	6	11	6	全商銀行	10	15	裏書譲渡
	12	売上代金	230,000	為手	6	大塚商店	池袋商店	10	12	11	12	〃	11	12	入金
	20	〃	200,000	約手	19	落合商店	落合商店	10	20	12	20	〃			

次の取引を支払手形記入帳に記入しなさい。

10月 8日 大森商店から商品¥370,000を仕入れ、代金は同店あての約束手形#9(振出日:10月8日 支払期日11月8日 支払場所:全商銀行)を降り出して支払った。

支払手形記入帳

平成 〇年		摘 要	金 額	手形 種類	手形 番号	受取人	振出人	振出 日		満期 日		支払場所	てん末		
													月	日	摘要
10	8	仕入代金	370,000	約手	9	大森商店	当店	10	8	11	8	全商銀行			

次の取引を支払手形記入帳に記入しなさい。

11月 8日 さきに振り出した約束手形#9が本日満期となり
当座預金から支払った。

支払手形記入帳

平成 〇年		摘 要	金 額	手形 種類	手形 番号	支払人	振出人 または 裏書人	振出日		満期日		支払場所	てん末		
													月	日	摘要
10	8	仕入代金	370,000	約手	9	大森商店	当 店	10	8	11	8	全商銀行	11	8	支払い

第14章 その他の債権・債務の記帳

1 貸付金・借入金

- 貸付金・・・借用証書により金銭を貸し付けた場合。
- 借入金・・・銀行などから借用証書により、金銭を借り入れたとき。

(例)

宇部商店は、山口商店に現金 ¥ 300, 000 を貸し付け、借用証書を受け取った。

<宇部商店>

(借) 貸付金 300, 000 (貸) 現金 300, 000

<山口商店>

(借) 現金 300, 000 (貸) 借入金 300, 000

借用証書の代わりに、約束手形を振り出して金銭の貸し借りが行われることがある。

- 手形貸付金
- 手形借入金

呉商店は、約束手形を振り出して玉野商店から¥250,000を借り入れ、利息¥20,000を差し引かれ、手取金は玉野商店振り出しの小切手で受け取り、ただちに当座預金とした。

<呉商店>

(借) 当座預金230,000 (貸) 手形借入金250,000
支払利息 20,000

<玉野商店>

(借) 手形貸付金250,000 (貸) 当座預金230,000
受取利息 20,000

2 前払金・前受金

- 前払金・・・商品代金の一部を仕入先に前払いしたとき。
- 前受金・・・前もって商品代金の一部を受け取ったとき。

有田商店は、奈良商店に商品 ¥240,000 を注文し、内金として、¥80,000 の小切手を振り出して支払った。奈良商店はこの小切手を受け取った。

<有田商店>

(借) 前払金 80,000 (貸) 当座預金 80,000

<奈良商店>

(借) 現金 80,000 (貸) 前受金 80,000

2 前払金・前受金

有田商店は、奈良商店から商品 ¥240,000を受け取り、内金を差し引き、残額は掛けとした。

<有田商店>

(借)	仕入	240,000	(貸)	前払金	80,000
				買掛金	160,000

<奈良商店>

(借)	前受金	80,000	(貸)	売上	240,000
	売掛金	160,000			

3 未収金・未払金

不要品の売却や、備品・消耗品の買い入れなどのように、**商品売買取引以外**の取引によって生じた**一時的な債権・債務**は、それぞれ**未収金・未払金**で処理する。

雑誌などの不用品を売却し、代金 ¥3,000 は月末に受け取ることにした。

(借) 未収金3,000 (貸) 雑 益3,000

3 未収金・未払金

営業用の金庫を買い入れ、代金 ¥ 220, 000 は月末に支払うことにした。

(借) 備 品 220, 000 (貸) 未払金 220, 000

3 未収金・未払金

営業用自動車を買入れ、代金¥2,000,000のうち、
¥800,000は小切手を振り出し、残額は、来月から毎月
¥200,000ずつの分割払いとした。

(借) 車両運搬具2,000,000	(貸) 当座預金 800,000
	未払金1,200,000

4 立替金・預り金

取引先などに対し、**一時的に金銭を立て替えて**支払ったときは、**立替金**勘定の借方に記入する。

一時的に金銭を預かったときは、**預り金**勘定の貸方に記入する。

立替金や預り金のうち、従業員に対するものは、**従業員立替金(資産)**、**従業員預り金(負債)**を用いる。

¥3,000は月末に受け取ることにした。

(借) 未収金3,000 (貸) 雑 益3,000

4 立替金・預り金

1. 従業員の家庭用品購入代金¥60,000を立て替えて、現金で支払った。

(借) 従業員立替金60,000 (貸) 現金60,000

4 立替金・預り金

2. 本月分の従業員の給料¥780,000から、所得税の源泉徴収額¥40,000と、かねて立替払いをしていた従業員に対する立替金¥60,000を差し引いて、残額を現金で支払った。

(借)	給料780,000	(貸)	所得税預り金	40,000
			従業員立替金	60,000
			現	金680,000

4 立替金・預り金

3. 所得税の源泉徴収額 ¥ 40, 000を税務署に現金で納付した。

(借) 所得税預り金40,000 (貸) 現金40,000

5 仮払金・仮受金

現金などの支出または収入があったが、その相手勘定または金額が確定していないときは、仮払金勘定(資産)または、仮受金勘定(負債)を用いて一時的に処理しておく。

5 仮払金・仮受金

10月1日 従業員の出張にあたり、旅費の概算額¥50,000を現金で渡した。

(借) 仮払金50,000 (貸) 現金 50,000

10月5日 出張中の従業員から、当店の当座預金口座に、¥200,000の振り込みがあったが、その内容は不明である。

(借) 当座預金200,000 (貸) 仮受金 200,000

5 仮払金・仮受金

10月8日 従業員が出張から帰り、上記の振り込みは長野商店に対する売掛金の回収であることがわかった。

(借) 仮受金200,000 (貸) 売掛金200,000

10月9日 旅費を精算して、残額の現金¥8,200を受け取った。

(借) 当座預金200,000 (貸) 仮受金 200,000

6 商品券

百貨店・専門店などが**商品券を発行したときは**、これと引き換えにその金額に相当する商品を引き渡す債務が生じるので、**商品勘定(負債)の貸方に**記入する。

6 商品券

1. 商品券¥20,000を発行し、代金は現金で受け取った。

(借) 現 金20,000 (貸) 商品券20,000

2. 商品¥30,000を売り渡し、代金のうち¥20,000は当店発行の商品券、残額は現金で受け取った。

(借) 商品券20,000 (貸) 売 上30,000
現 金10,000

第15章 有価証券の記帳

1 有価証券の買い入れ

企業は資金の余裕があるとき、市場価格の値上がりを期待し、いつでも売却できる**公債・社債・株式などの有価証券**を買い入れて保有することがある。

有価証券を取得したとき、その**取得原価**で**売買目的有価証券**(資産)の借方に記入する。

1 有価証券の買い入れ

1. 売買目的で、額面¥1,000,000の社債を@¥98.50で買い入れ、代金は小切手を振り出して支払った。

(借) 売買目的有価証券985,000 (貸) 当座預金985,000

$$1,000,000 \times \frac{98.50}{100} = 985,000$$

1 有価証券の買い入れ

2. 売買目的で、和歌山商事株式会社の株式10株を1株につき¥65,000で買い入れ、代金は小切手を振り出して支払った。

(借) 売買目的有価証券650,000 (貸) 当座預金650,000

$$65,000 \times 10 \text{株} = 650,000$$

2 有価証券の売却

買い入れた額面¥1,000,000の社債(帳簿価額@¥98.50)を
@¥99で売却し、代金は現金で受け取った。

(借)	現	金	990,000	(貸)	売買目的有価証券	985,000
					有価証券売却益	5,000

$$1,000,000 \times \frac{99}{100} = 990,000$$

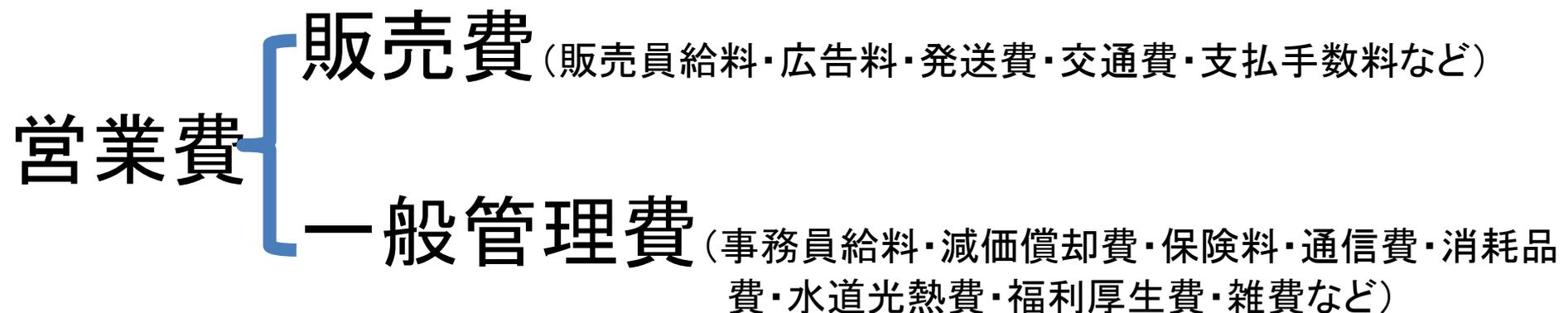
$$1,000,000 \times \frac{98.50}{100} = 985,000$$

第16章 営業費の記帳

1 営業費の意味とその種類

企業の営業活動のために生ずる費用のうち、売上原価以外の費用を**営業費**という。

営業費は、販売活動に関係して発生する**販売費**と、企業全般を管理するために発生する**一般管理費**とに大別される。



2 営業費の記帳

営業費を支払ったときは、給料勘定、広告料勘定などのように、その費用の種類ごとに総勘定元帳のそれぞれの勘定口座に記入する

上記のほか、すべての営業費を一括して営業費勘定で記帳する方法もある。この方法によるときは、営業費の明細を記録する補助簿として営業費内訳帳(営業費明細帳)を用いる。

第17章 資本の記帳

1 個人企業の資本金

- 開業にあたり、企業主が**元入れ**したときは**資本金勘定の貸方**に記入する。
- 事業を拡張するために行われる**追加元入れ**や、決算の結果、**当期純利益が計上されたとき**もその貸方に記入する。
- 反対に、企業主が企業の現金や商品などを**私用**のために使ったときや、決算の結果、**当期純損失が計上されたとき**は、資本金勘定の借方に記入する。

資本金

1000000

2 引出金

- 企業主が資本の引き出しをひんぱんに行う場合、これをそのつど記入すると資本金勘定がはんざつになる。
- このため、別に引出金勘定を設け、期末にこの勘定の残高を資本金勘定の借方に振り替える。

資本金

引出額

元入額

追加元入額

当期純利益額

12月10日 兵庫商店(個人企業・資本金¥1,500,000)では、事業拡張のため企業主が、現金¥300,000を追加元入れました。

(借) 現金 300,000 (貸) 資本金 300,000

引出金

資本金

1,500,000

300,000

12月20日 企業主が私用のため、現金 ¥50,000を引出した。

(借) 引出金 50,000 (貸) 現金 50,000

引出金

50,000

資本金

1,500,000

300,000

12月23日 電気代 ¥6,500 を現金で支払った。このうち、家計の負担すべき額は ¥1,500 である。

(借)	水道光熱費	5,000	(貸)	現金	6,500
	引出金	1,500			

引出金

50,000

1,500

資本金

1,500,000

300,000

12月25日 企業主が私用のため、原価 ¥ 30, 000 の商品を使った。

(借) 引出金 30,000 (貸) 仕入 30,000

引出金

50,000

1,500

30,000

資本金

1,500,000

300,000

12月31日 決算にあたり、引出金勘定の残高¥81,500を資本金勘定に振り替えた。

(借) 資本金 81,500 (貸) 引出金 81,500

引出金

50,000	81,500
--------	--------

1,500	
-------	--

30,000	
--------	--

資本金

81,500	1,500,000
--------	-----------

	300,000
--	---------

12月31日 決算を行い、当期純利益¥150,000を損益勘定から資本金勘定に振り替えた。

(借) 損益 150,000 (貸) 資本金 150,000

損益

資本金

3,350,000	3,500,000
150,000	

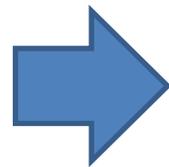
81,500	1,500,000
	300,000
	150,000

第18章 税金の記帳

1 個人企業の税金

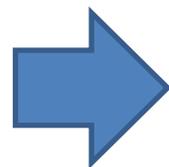
- 個人企業が納付する税金には、所得税・住民税・事業税・固定資産税・印紙税・消費税などがある。
- これらの税金は、国税と地方税に分けられる。

費用として
処理できない税金



所得税
住民税

費用として
処理できる税金



事業税
固定資産税
印紙税
消費税

2 所得税と住民税

1 所得税

- 所得税 個人企業を営んでいる者は、毎年1月1日から12月31日までの1年間に事業や配当収入などから得た所得(利益や利子収入など)に対する税金を納めなければならない。
- 所得税は、翌年の2月16日から3月15日までに税務署に申告して納付する。これを確定申告という。
- 予定納税制度によるときは、前年度の所得をもとに計算した税額の3分の1ずつを7月と11月にあらかじめ納付し、翌年の確定申告の時に差額を納める。

7月20日 予定納税制度にもとづいて、所得税の本年度第1期分 ¥60,000を現金で納付した。

(借) 引出金 60,000 (貸) 現金 60,000

11月10日 所得税の本年度第2期分 ¥60,000を現金で納付した。

(借) 引出金 60,000 (貸) 現金 60,000

3月15日 確定申告を行い、本年度の所得税は¥215,000となり、第1期分第2期分¥120,000を差し引いき¥95,000を現金で納付した。

(借) 引出金 95,000 (貸) 現金 95,000

2 住民税

- 住民税は、その地域の住民に課されるもので、その税額は、各個人に均等に課される均等額と、前年の所得にもとづいて、課される所得割額を合計した額である。
- 住民税は、6月、8月、10月および翌年の1月の4期に分けて納付する。
- 住民税は費用として認められないので、納付したときは引出金勘定の借方に記入する。

6月20日 住民税の第1期分 ¥31,000を現金で納付した。

(借) 引出金 31,000 (貸) 現金 31,000

3 事業税と固定資産税

1 事業税

- 個人が商品の販売その他の事業を営んでいる場合には、その事業に対して、事業税が課される。
- その納税額は前年度の事業所得などをもとにして計算し、8月と11月の2期に分けて納付する。
- 事業税は、事業所得を計算するうえで、費用として認められるので、納付したとき租税公課（または事業税）勘定の借方に記入する。

8月28日 事業税の第1期分 ¥8,000を現金で納付した。

(借) 租税公課 8,000 (貸) 現金 8,000

3 事業税と固定資産税

2 固定資産税

- 固定資産税は、土地・建物などの固定資産に課される税金である。
- 毎年1月1日に所有している固定資産の評価額にもとづいて税額が決め4月・7月・12月と翌年の2月に分けて納付する。
- 固定資産税は、費用として認められるので、納付したとき租税公課(または事業税)勘定の借方に記入する。

4月2日 固定資産税の第1期分 ¥12,000を現金で納付した。

(借) 租税公課 12,000 (貸) 現金 12,000

納税通知書を受け取ったとき未払税金勘定で処理する方法もある。

事業税 ¥ 16, 000に関する納税通知書を受け取った。

(借) 租税公課 16, 000 (貸) 未払税金 16, 000

第1期分の事業税 ¥ 8, 000を現金で納付した。

(借) 未払税金 8, 000 (貸) 現金 8, 000

4 その他の税金

1 印紙税

- 印紙税は、商品代金の領収書や契約書を作成したり、手形を振り出したりするときに国に納める税金である。
- 印紙税は費用として認められるので納付したとき租税公課(または事業税)勘定の借方に記入する。

収入印紙 ¥ 5, 000を購入し、代金は現金で支払った。

(借) 租税公課 5, 000 (貸) 現金 5, 000

4 その他の税金

2 消費税

- 消費税は、商品の販売やサービスの提供に対してかかる税金である。
- 消費税は商品などの販売価格に加算され、したがって、消費者が負担するが、その徴収と納付は企業が行う。
- 消費税の会計処理には、税込み方式と税抜き方式がある。税込み方式は、消費税を含めた総額で会計処理する方式で、税抜き方式は、消費税を区分して会計処理する方式である。

4 その他の税金

2 消費税

- 仕入れに含まれる消費税は、仕入時に消費者に変わって企業が仮払いしたものであり、仮払い消費税勘定の借方に記入する。
- 売上に対する消費税は、消費者から預かったものであり、仮受消費税勘定の貸し方に記入する。
- 企業が納付する消費税は、売上の時に預かった仮受消費税から、仕入のときに払った仮払い消費税を差し引いた額であり、期末に未払消費税勘定に記入する。

税込み方式の場合

商品 ¥100,000 を仕入れ、代金はその消費税 ¥5,000 とともに掛けとした。

(借) 仕入 105,000 (貸) 買掛金 105,000

上記商品を ¥130,000 で売り上げ、代金はその消費税 ¥6,500 とともに掛けとした。

(借) 売掛金 136,500 (貸) 売上 136,500

税込み方式の場合

期末に納付する消費税額¥1,500を計上した。

(借) 租税公課 1,500 (貸) 未払消費税1,500

消費税¥1,500を現金で納付した。

(借) 未払消費税 1,500 (貸) 現金 1,500

税抜方式の場合

商品 ¥100,000を仕入れ、代金はその消費税¥5,000とともに掛けとした。

(借)	仕	入	100,000	(貸)	買掛金	105,000
	仮払消費税		5,000			

上記商品を ¥130,000で売り上げ、代金はその消費税¥6,500とともに掛けとした。

(借)	売掛金	136,500	(貸)	売	上	130,000
				仮受消費税		6,500

税抜方式の場合

期末に納付する消費税額¥1,500を計上した。

(借)	仮受消費税	6,500	(貸)	仮払消費税	5,000
				未払消費税	1,500

消費税¥1,500を現金で納付した。

(借)	未払消費税	1,500	(貸)	現金	1,500
-----	-------	-------	-----	----	-------

第19章 決算(その2)

1 決算整理

1 貸し倒れの見積もり

これまで、学んだ売掛金に対して見積もるほかに、**受取手形に対しても同様に貸倒引当金**を見積もる。

1 決算整理

1 貸し倒れの見積もり

例1

12月31日 決算にあたり、受取手形の期末残高 ¥ 500,000 と売掛金の期末残高 ¥ 900,000 に対して2%の貸倒引当金を見積もった。

ただし、貸倒引当金勘定の残高が ¥ 20,000 ある。

$$\begin{aligned} \text{計算式} \quad & (500,000 + 900,000) \times 0.02 = 28,000 \\ & 28,000 - 20,000 = 8,000 \end{aligned}$$

(借) 貸倒引当金繰入 8,000 (貸) 貸倒引当金 8,000

1 決算整理

2 減価償却の記帳(間接法)

すでに学習した方法は、固定資産の取得原価から減価償却を直接差し引く**直接法**であった。

間接法では、固定資産の勘定ごとに、減価償却累計額勘定(評価勘定)を設けて、その貸方に減価償却額を記入する。

間接法では、**固定資産の取得原価そのまま繰り越されるので、固定資産の取得原価と、これまでの減価償却額**を勘定記入面から知ることができる。

1 決算整理

2 減価償却の記帳(間接法)

例2

12月31日 決算にあたり、備品について定額法で3期目の減価償却を行った。この備品の取得原価は¥400,000 残存価額は取得原価の10% 耐用年数は8年である。

計算式

$$\frac{400,000 - 40,000}{8} = 45,000$$

(借) 減価償却費45,000 (貸) 備品減価償却累計額45,000

1 決算整理

2 減価償却の記帳(間接法)

固定資産を売却したとき

- ・その固定資産の減価償却累計額を計算し、減価償却累計額勘定の借方に記入する。
- ・固定資産の帳簿価額と売却価額との差額は固定資産売却益(損)で処理する。

1 決算整理

2 減価償却の記帳(間接法)

例3

1月5日 例2の備品を、6年経過したとき、¥150,000で売却し、代金は月末に受け取ることにした。

計算式

$$\text{1年あたり減価償却額} \quad 45,000 \times 6\text{年} = 270,000$$

固定資産売却益

$$150,000 - (400,000 - 270,000) = 20,000$$

(借)	備品減価償却累計額	270,000	(貸)	備品	400,000
	未収金	150,000		固定資産売却益	20,000

1 決算整理

3 有価証券の評価

売買目的で買い入れた有価証券について、決算にあたり、帳簿価額を時価で評価し、修正することも認められている。これを**有価証券の評価替え**という。

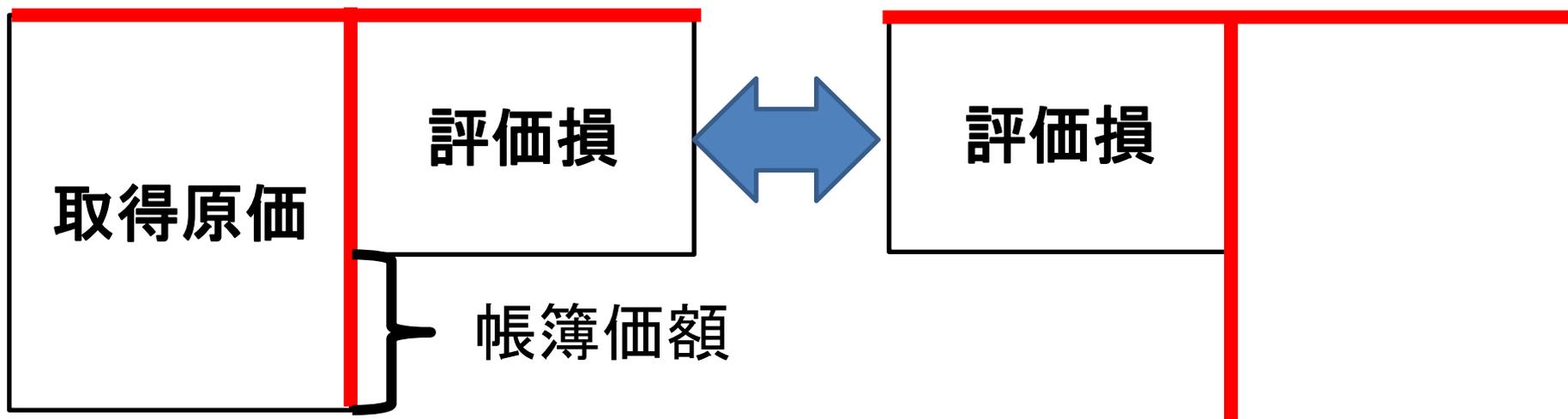
時価が、帳簿価額より低いときは時価まで引き下げ、時価と帳簿価額の差額を**有価証券評価損勘定(費用)**の借方と、**売買目的有価証券の貸方**に記入する。

反対に、**時価が、帳簿価額より高い**ときは時価まで引き上げ、時価と帳簿価額との差額を**有価証券評価益(収益)**の貸方と、**売買目的有価証券の借方**に記入する。

時価が帳簿価額より低いときの処理

売買目的有価証券

有価証券評価損



1 決算整理

3 有価証券の評価

例4

12月31日 決算にあたり、売買目的で保有している高松商事株式会社の株式10株(帳簿価額@¥60,000)を1株¥55,000(時価)に評価替えした。

計算式

$$\begin{aligned} \text{有価証券評価損} & (60,000 - 55,000) \times 10 \text{株} \\ & = 50,000 \end{aligned}$$

(借) 有価証券評価損 50,000 (貸) 売買目的有価証券50,000

2 費用・収益の繰り延べ

- 保険・支払家賃や受取地代・受取利息などの諸勘定の記入は、普通、現金の収入や支出があったときに行われる。
- しかし、これらの勘定残高のなかには、当期分の費用・収益のほかに、次期以降に属する費用・収益が含まれていることがある。
- このような場合、決算にあたり、正しい純損益を計算するために、次期以降に属する費用・収益を当期の費用・収益から除き、次期に繰り延べなければならない。これを費用・収益の繰り延べという。

2 費用・収益の繰り延べ

1 費用の繰り延べ

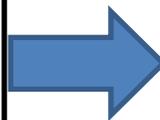
- 保険料・支払家賃など、費用として支払った金額のうち次期以降に属する分は、費用の勘定から差し引くとともに、前払保険料勘定・前払利息勘定(資産)などを設けて、その借方に記入し、次期に繰り延べる。
- これを費用の繰り延べといい、資産として次期に繰り延べる前払分を前払費用という。

費用の諸勘定

支払額	前払額
	当期分

前払費用の諸勘定(資産)

前払額	損益
費用	



1 費用の繰り延べ

例5

6月1日 火災保険料1年分 ¥24,000を現金で支払った。

(借) 保険料 24,000 (貸) 現金 24,000

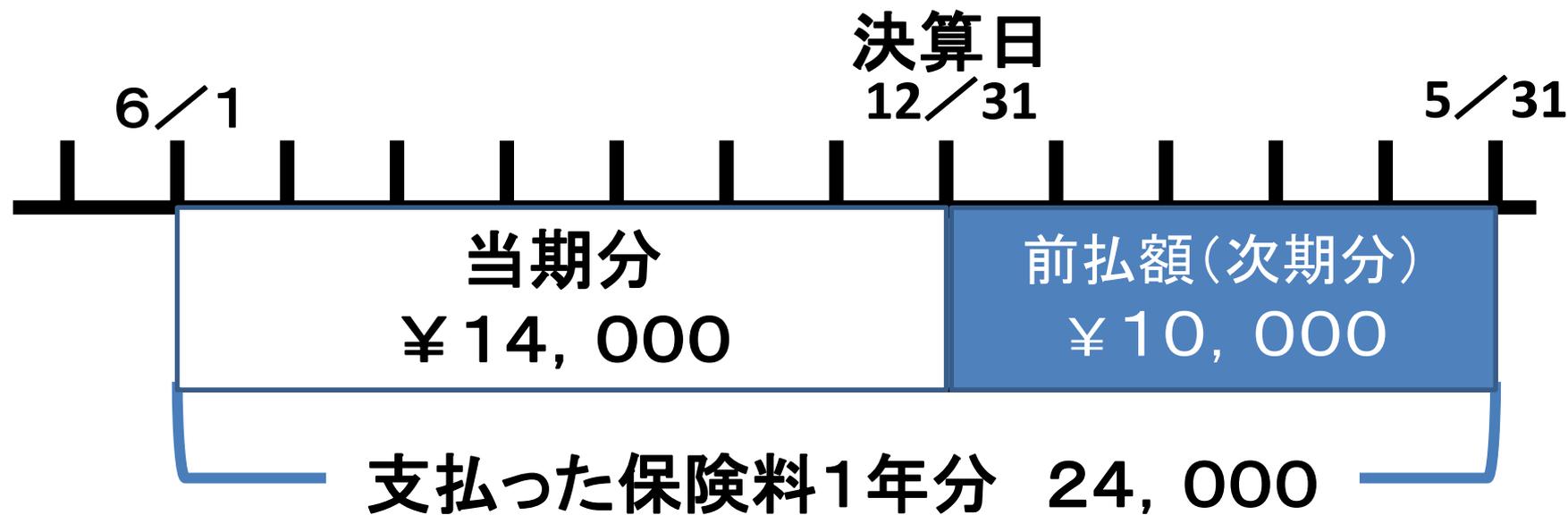
12月31日 決算にあたり、保険料のうち、前払分 ¥10,000を次期に繰り延べた。

(借) 前払保険料10,000 (貸) 保険料 10,000

12月31日 保険料の当期分 ¥14,000を損益勘定に振り替えた。

(借) 損 益 14,000 (貸) 保険料 14,000

1 費用の繰り延べ



2 費用・収益の繰り延べ

1 再振替

- 繰り延べた費用は次期にはその期の費用となるから、**次期の最初の日付で元の費用の勘定に振り替える。**
- これを**再振替**といい、このための仕訳を**再振替仕訳**という。

1月1日 前払保険料¥10,000を保険料勘定に再振替した。

(借) 保険料 10,000 (貸) 前払保険料 14,000

1 費用の繰り延べ流れの確認

6月1日 火災保険料1年分 ¥24,000を現金で支払った。

(借) 保険料 24,000 (貸) 現金 24,000

12月31日 決算にあたり、保険料のうち、前払分¥10,000を次期に繰り延べた。

(借) 前払保険料10,000 (貸) 保険料 10,000

12月31日 保険料の当期分¥14,000を損益勘定に振り替えた。

(借) 損 益 14,000 (貸) 保険料 14,000

1月1日 前払保険料¥10,000を保険料勘定に再振替した。

(借) 保険料 10,000 (貸) 前払保険料10,000

2 費用・収益の繰り延べ 消耗品費勘定の整理

- 事務用消耗品などを買入れたとき、普通消耗品費勘定の借方に記入する。しかし、決算にあたり、**未使用分**があれば、**その金額を消耗品費勘定から差し引くとともに、消耗品勘定(資産)を設けて、その勘定の借方に振り替えて、次期に繰り延べる。**
- 消耗品は**次期**になれば使用されて、**費用**となるから、**次期の最初の日付で消耗品費勘定に再振替**する。



1 消耗品費の繰り延べ、再振替の確認

6月10日 事務用の文房具¥50,000を現金で買入れた。

(借) 消耗品費 50,000 (貸) 現金 50,000

12月31日 決算にあたり、消耗品の未使用分¥16,000を次期に繰り延べた。

(借) 消耗品 16,000 (貸) 消耗品費 16,000

12月31日 消耗品費の当期分¥34,000を損益勘定に振り替えた。

(借) 損益 34,000 (貸) 消耗品費 34,000

1月1日 消耗品¥16,000を消耗品費勘定に再振替した。

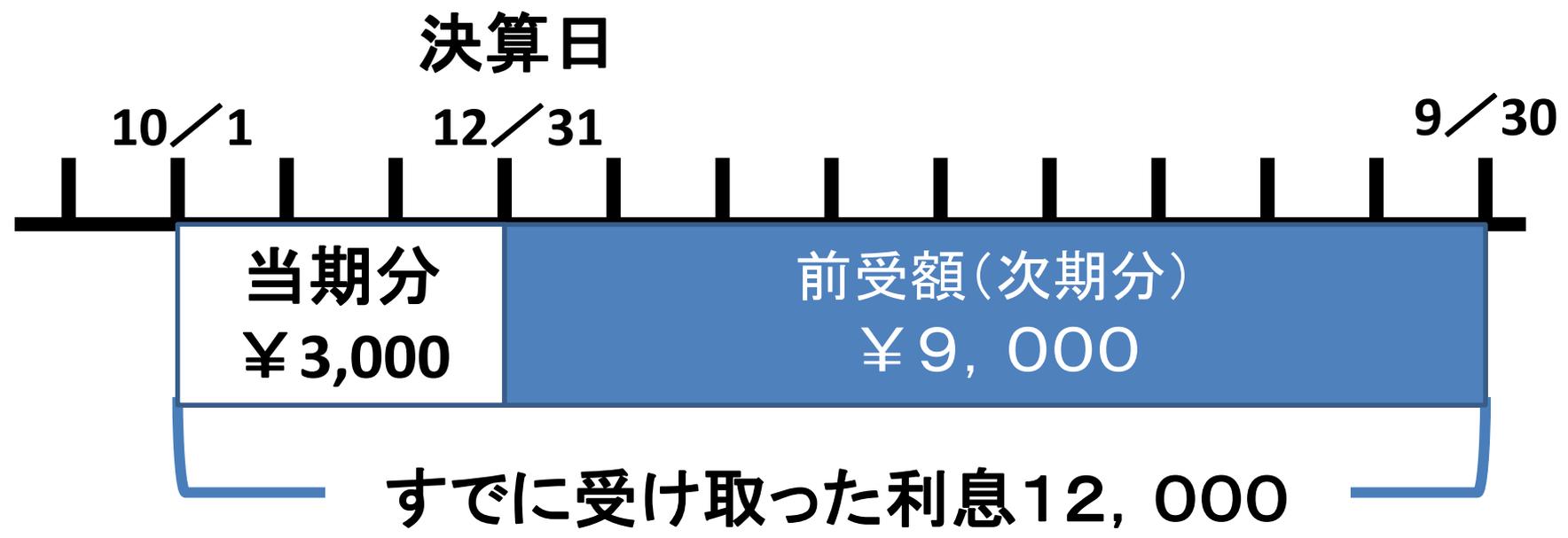
(借) 消耗品費 16,000 (貸) 消耗品 16,000

2 費用・収益の繰り延べ

2 収益の繰り延べ

- 受取利息・受取家賃など、**収益として受け取った金額のうち、次期以降に属する分(前受分)**は、**収益の勘定から差し引く**とともに、前受利息勘定・前受家賃勘定(ともに負債)などを設けて、その貸方に記入し、次期に繰り延べる。
- これを**収益の繰り延べ**といい、**負債**として次期に繰り延べる前受分を**前受収益**という。

2 収益の繰り延べ



2 収益の繰り延べ流れの確認 例7

10月1日 利息1年分 ¥12,000を現金で受け取った。

(借) 現金 12,000 (貸) 受取利息 12,000

12月31日 決算にあたり、すでに受け取ってある利息 ¥12,000のうち、前受分 ¥9,000を次期に繰り延べた。

(借) 受取利息 9,000 (貸) 前受利息 9,000

12月31日 受取利息の当期分 ¥3,000を損益勘定に振り替えた。

(借) 受取利息 3,000 (貸) 損益 3,000

1月1日 前受利息 ¥9,000を受取利息勘定に再振替した。

(借) 前受利息 9,000 (貸) 受取利息 9,000

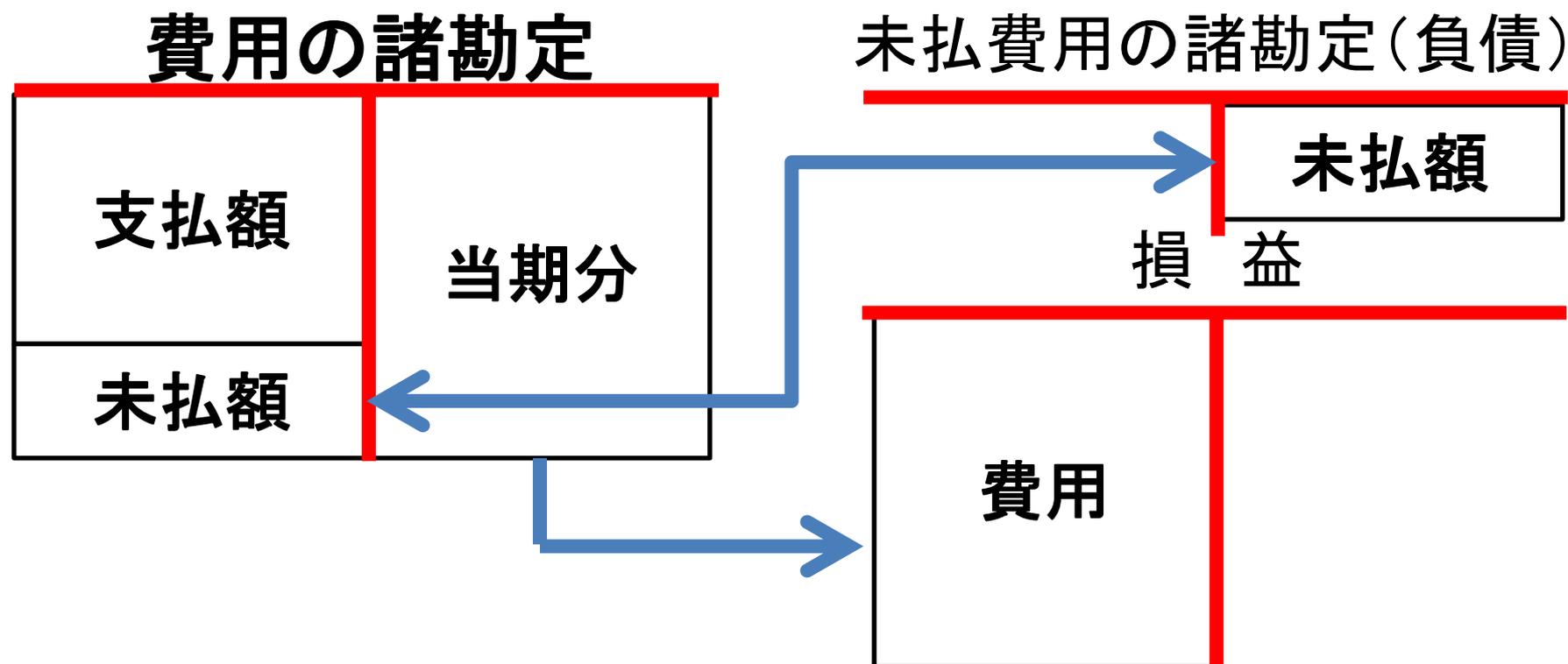
3 費用・収益の見越し

1 費用の見越し

- 支払利息・支払地代などの費用の諸勘定のうち、**未払い**であっても、**当期の費用**として発生しているものがあるれば、**その分を費用の諸勘定に加える**とともに、**未払利息勘定・未払地代勘定(負債)**などを設け、その勘定の貸方に記入する。
- これを**費用の見越し**といい、負債として次期に繰り越す未払分を**未払費用**という。
- 未払費用は、次期の最初の日付で、もとの費用の勘定に再振替する。

3 費用・収益の見越し

1 費用の見越し



2 費用の見越しの流れの確認 例8

12月31日 決算にあたり、当期の家賃未払額¥18,000を計上した。

(借) 現金 18,000 (貸) 未払家賃 18,000

12月31日 支払家賃の当期分¥72,000を損益勘定に振り替えた。

(借) 損益72,000 (貸) 支払家賃 72,000

1月1日 支払家賃¥18,000を支払家賃勘定に再振替えた。

(借) 未払家賃 18,000 (貸) 支払家賃 18,000

1月31日 家賃¥24,000を現金で支払った。

(借) 支払家賃 24,000 (貸) 現金 24,000

3 費用・収益の見越し

2 収益の見越し

- 受取利息・受取地代などの収益の諸勘定のうち、**未収**であっても、**当期の収益として発生している**ものがあれば、その分を**収益の勘定に加える**とともに、**未収利息勘定・未収地代勘定(資産)**などを設け、その勘定の借方に記入する。
- これを**収益の見越し**といい、資産として次期に繰り越す未収分を**未収収益**という。
- 未収収益は、次期の最初の日付で、もとの収益の勘定に再振替する。

2 収益の見越しの流れの確認 例8

12月31日 決算にあたり、当期の地代未収額¥1,000を計上した。

(借) 未収地代 15,000 (貸) 受取地代 15,000

12月31日 受取地代の当期分¥60,000を損益勘定に振り替えた。

(借) 受取地代 60,000 (貸) 損益 60,000

1月1日 未収家賃¥15,000を支払家賃勘定に再振替えた。

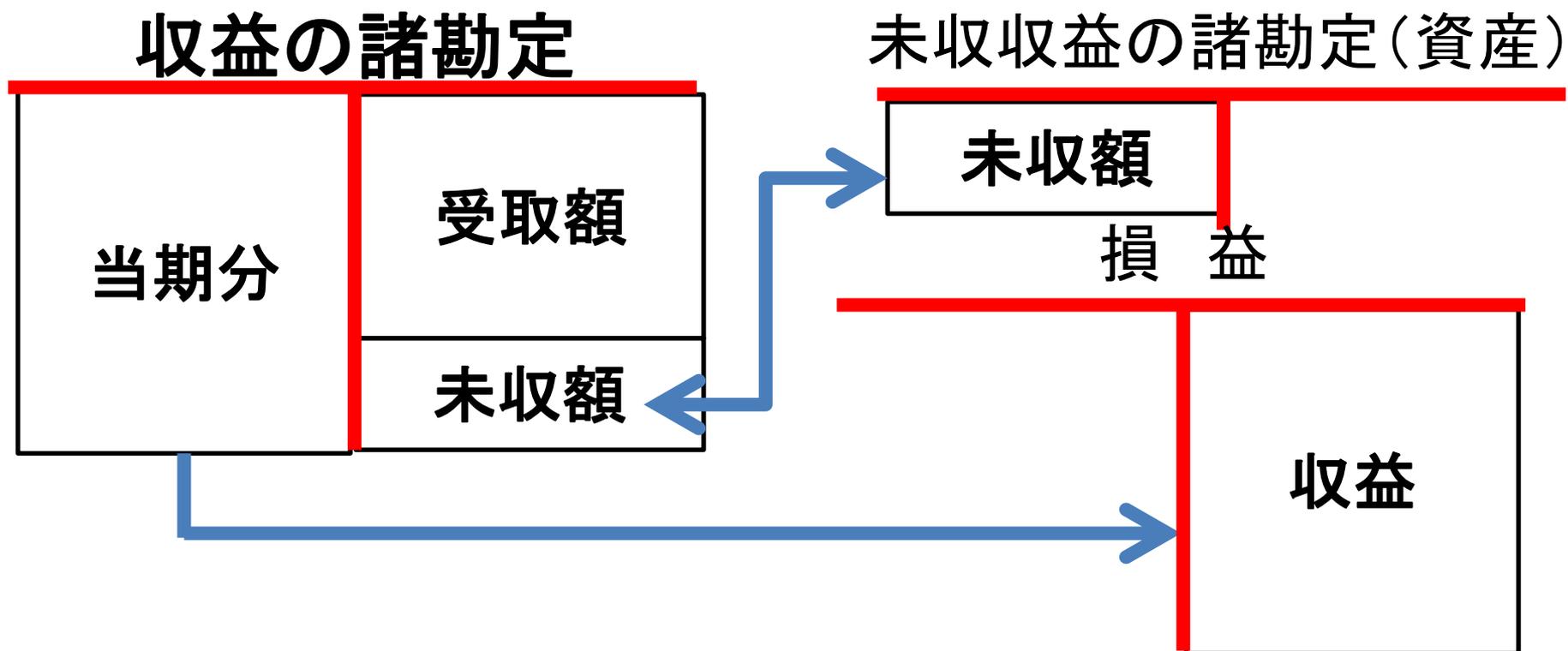
(借) 受取地代 15,000 (貸) 未収地代 15,000

2月28日 地代¥25,000を現金で受け取った。

(借) 現金 25,000 (貸) 受取地代 25,000

3 費用・収益の見越し

1 収益の見越し



第20章 帳簿

第21章 仕訳伝票と3伝票制

教科書P162

1 証ひょうと伝票

- 取引の**事実を証明する資料**を証ひょうという。
- 証ひょうには、相手方から受け取る納品書・領収証などや、相手方に渡す納品書・領収証・小切手などの控えがある。
- これらの証ひょうをそのままファイルしてもよいが、大きさが違ったりして取り扱いにくい。
- そこで**一定の形式を印刷した紙**に取引の内容を記入した**伝票**を使用する。

2 仕訳伝票

- 取引を普通の仕訳の形式で記入する伝票を仕訳伝票という。

仕 訳 伝 票					
平成〇年 月 日				No.	
勘定科目	元 丁	借 方	勘定科目	元 丁	借 方
合 計			合 計		
摘要					

3 3伝票制

- 取引を入金取引・出金取引とそれ以外の取引の3つに分け、入金取引は入金伝票に、出金取引は出金伝票に、それ以外の取引は振替伝票に記入する。
- この方法は、3種類の伝票を用いているので、3伝票制という。

入金伝票

		<u>入金伝票</u>		
		平成○年	月	日
				<u>No.</u> _____
科目		入金先		
摘要		金額		
合計				

出金伝票

		<u>出金伝票</u>		
	平成〇年 月 日			<u>No.</u>
科目		入金先		
摘要		金額		
合計				

振替伝票

				振替伝票			
				平成〇年 月 日		No.	
勘定科目		借 方		勘定科目		借 方	
合 計				合 計			
摘要							

第12章 三分法の整理

問題集P97

次の空欄の金額を計算しなさい。

	期首商品棚卸高	純仕入高	期末商品棚卸高	売上原価	純売上高	商品売買益
(1)	65,000	308,000	58,000	315,000	416,000	101,000
(2)	71,000	445,000	83,000	433,000	495,000	62,000
(3)	119,000	652,000	134,000	637,000	774,000	137,000

売上原価の計算を思い出そう(リンク)

売上原価 = 期首商品棚卸高 + 純仕入高 - 期末商品棚卸高

次の整理仕訳を仕入勘定に記入し、振替仕訳を行い、仕入勘定を締め切りなさい。

12/31 (借)仕 入 85,000 (貸)繰越商品 85,000
 " (借)繰越商品 93,000 (貸)仕 入 93,000

12/31 (借)損 益 546,000 (貸)仕 入 546,000

仕入

(純仕入高)	554,000	12/31	繰越商品	93,000
12/31 前期繰越	85,000	"	損 益	546,000
	<u>639,000</u>			<u>639,000</u>

次の決算のさいにおこなわれた4つの仕訳を、下記の勘定に記入して締め切りなさい。勘定には、仕訳の番号・相手科目・金額を記入しなさい。

①(借)	仕入	235,000	(貸)	繰越商品	235,000
②(借)	繰越商品	264,000	(貸)	仕入	264,000
③(借)	売上	1,283,000	(貸)	損益	1,283,000
④(借)	損益	823,000	(貸)	仕入	823,000

繰越商品

1/1 前期繰越	235,000	①仕入	235,000
②仕入	<u>264,000</u>	次期繰越	<u>264,000</u>
	<u>499,000</u>		<u>499,000</u>
1/1 前期繰越	264,000		

仕入

(総仕入高)	873,000	(仕入戻し高)	21,000
①繰越商品	235,000	②繰越商品	264,000
	<u>1,108,000</u>	④損益	<u>823,000</u>
			<u>1,108,000</u>

売上

(売上戻り高)	33,000	(総売上高)	1,316,000
③損益	<u>1,283,000</u>		<u>1,316,000</u>
	<u>1,316,000</u>		

損益

④仕入	823,000	③売上	1,283,000
-----	---------	-----	-----------

次の決算整理仕訳をおこない、繰越商品勘定に記入して締め切りなさい。決算日は12月31日、期末商品棚卸高は¥207,000である。

借 方		貸 方	
仕 入	183,000	繰越商品	183,000
繰越商品	207,000	仕 入	207,000

繰越商品

1/1	前期繰越	183,000	12/31	仕 入	183,000
12/31	仕 入	<u>207,000</u>	"	次期繰越	<u>207,000</u>
		<u>390,000</u>			<u>390,000</u>
1/1	前期繰越	207,000			

第12章 貸し倒れの見積もり

問題集P100

24-1

決算にあたり、売掛金残高 ¥280,000 に対して、5%の貸倒引当金を設けた場合の整理仕訳(修正仕訳)を示しなさい。

$$280,000 \times 5\% = 14,000$$

(借) 貸倒償却 14,000 (貸) 貸倒引当金14,000

24-2

決算にあたり、売掛金残高 ¥ 540,000 に対して5%の貸倒引当金を設けた。決算日は12月31日である。

(1) 貸倒引当金に残高がない場合

$$54,000 \times 5\% = 27,000$$

(借) 貸倒償却 27,000 (貸) 貸倒引当金 27,000

貸倒償却

12/31	貸倒引当金	<u>27,000</u>	12/31	損	<u>益27,000</u>
-------	-------	---------------	-------	---	----------------

貸倒引当金

12/31	次期繰越	<u>27,000</u>	12/31	貸倒償却	<u>27,000</u>
-------	------	---------------	-------	------	---------------

決算にあたり、売掛金残高 ¥540,000 に対して5%の貸倒引当金を設けた。決算日は12月31日である。

(2) 貸倒引当金に¥8,000の残高がある場合

$$54,000 \times 5\% = 27,000$$

$$27,000 - 8,000 = 19,000$$

(借) 貸倒償却 19,000 (貸) 貸倒引当金 19,000

貸倒償却

12/31 貸倒引当金 <u>19,000</u>	12/31 損	益 <u>19,000</u>
---------------------------	---------	-----------------

貸倒引当金

12/31 次期繰越 27,000	1/1 前期繰越 8,000
<u>27,000</u>	12/31 貸倒償却 19,000
	<u>27,000</u>

24-3

大津商店が倒産し、同店に対する売掛金¥75,000が回収不能となった。ただし、貸倒引当金勘定の残高が¥58,000ある。

(借)	貸倒引当金	58,000	(貸)	売掛金	75,000
	貸倒償却	17,000			

次の連続した取引の仕訳を示し、貸倒引当金勘定に記入しなさい。(差額を計上する方法による。)

12月31日 決算にあたり、売掛金勘定残高¥864,000
に対し、5%の貸倒引当金を設けた。

(借) 貸倒償却43,200 (貸) 貸倒引当金 75,000

3月10日 前期からくり超された神戸商店に対する売
掛金¥35,000が回収不能となった。

(借) 貸倒引当金35,000 (貸) 売掛金 35,000

12月31日 決算にあたり、貸倒引当金を売掛金勘定
残高¥1,250,000の5%とする。

(借) 貸倒償却54,300 (貸) 売掛金 54,300

第12章 減価償却(直接法)

問題集P102

減価償却

- 備品・建物などの固定資産は、次第に価値が減少していくので、その価値の減少額を見積もり、これを当期の費用として計上する。
- また固定資産の金額をその額だけ減少させる。
- この手続きを減価償却という。

25-1 減価償却(直接法)

次の備品の減価償却費を定額法によって計算しなさい。

取得原価 ¥200,000

残存価額は取得原価の10%

耐用年数 8年

決算 年1回

$$\frac{200,000 - 20,000}{8\text{年}} = \text{減価償却費 } 22,500$$

25-2

次の決算整理仕訳を行い、下記の勘定に記入して締め切りなさい。(直接法によること)
備品の減価償却費を定額法によって計上した。

備品の取得原価	¥300,000
残存価額は取得原価の	10%
耐用年数	10年
決算日	12月31日

$$\frac{300,000 - 30,000}{10\text{年}} = \text{減価償却費 } 27,000$$

(借) 減価償却費 27,000 (貸) 備品 27,000

25-3

次の決算整理仕訳を行い、備品勘定に記入して締め切りなさい。(直接法によること)

備品の減価償却費を定額法によって計上した。

備品の取得原価	¥400,000
残存価額は取得原価の	0
耐用年数	8年
決算日	12月31日

$$\frac{400,000 - 0}{8\text{年}} = \text{減価償却費 } 50,000$$

(借) 減価償却費 50,000 (貸) 備品 50,000

次の決算によって、決算仕訳を示し、下記の勘定に記入して締め切りなさい。

決算整理事項 建物減価償却高 ¥30,000(直接法)

	借方	貸方
整理仕訳	減価償却費 30,000	建物 30,000
振替仕訳	損 益 30,000	減価償却費 30,000

減価償却費

12/31 建物 30,000 12/31 損益 30,000

建物

1/1 次期繰越	1,320,000	12/31 減価償却費	30,000
		// 次期繰越	<u>1,290,000</u>
	<u>1,320,000</u>		<u>1,320,000</u>

次の連続した取引の仕訳を示し、備品勘定に記入して締め切りなさい。

12/31 減価償却費を定額法で計算し、直接法で記帳した。(残存価額は取得原価の10% 耐用年数12年)

	借方		貸方	
12/31	減価償却費	31,500	備品	31,500
12/31	減価償却費	31,500	備品	31,500

備品

1/12 当座預金 420,000

420,000

1/1 前期繰越 388,500

388,500

1/1 前期繰越 357,000

12/31 減価償却費 31,500

// 次期繰越 388,500
420,000

12/31 減価償却費 31,500

// 次期繰越 357,000
388,500

第12章 8桁精算表

問題集P105

精算表

- 6桁精算表に「整理記入」欄を設けた精算表。
- 8桁精算表の作り方
- ①残高試算表欄に勘定残高を記入。
- ②決算整理事項を整理記入欄に記入。
- ③残高試算表の金額と整理事項を加減し、損益計算書・貸借対照表に記入する。
- ④損益計算書・貸借対照表の金額をそれぞれ合計し、その差額を当期純利益または純損失として記入する。

次の決算整理事項によって、精算表を完成しなさい。

決算整理事項

- a. 期末商品棚卸高 ￥853,000
- b. 貸倒引当金 売掛金残高の5%とする。
(差額を計上する方法)
- c. 備品減価償却高 取得原価 ￥320,000
(残存価額は取得原価の10%・耐用年数8年・定額法)
直接法によって記帳している。
- d. 現金過不足勘定の ￥2,000は雑益とする。
- e. 引出金勘定は整理する。

次の決算整理事項によって、精算表を完成しなさい。

決算整理事項

a. 期末商品棚卸高 ￥853,000

仕入 819,000 繰越商品 819,000

繰越商品 853,000 仕入 853,000

次の決算整理事項によって、精算表を完成しなさい。

決算整理事項

- b. 貸倒引当金 売掛金残高の5%とする。
(差額を計上する方法)

売掛金残高が 1,260,000

貸倒引当金に残高が14,000あるので、

新に設定する貸倒引当金は

$$1,260,000 \times 5\% - 14,000 = 49,000$$

貸倒償却 49,000 貸倒引当金 49,000

次の決算整理事項によって、精算表を完成しなさい。

決算整理事項

- c. 備品減価償却高 取得原価 ¥ 320, 000
(残存価額は取得原価の10%・耐用年数8年・定額法)
直接法によって記帳している。

$$\frac{320,000 - 32,000}{8\text{年}} = \text{減価償却費 } 36,000$$

(借) 減価償却費 36,000 (貸) 備 品 36,000

次の決算整理事項によって、精算表を完成しなさい。

決算整理事項

d. 現金過不足勘定の¥2,000は雑益とする。

現金過不足

雑益

2,000 | 2,000  | 2,000

(借) 現金過不足 2,000 (貸) 雑益 2,000

次の決算整理事項によって、精算表を完成しなさい。

決算整理事項

e. 引出金勘定は整理する。

引出金

資本金

150,000

150,000

150,000

1,800,000

(借) 資本金

150,000

(貸) 引出金

150,000

精 算 表

平成〇年12月31日

勘定科目	残高試算表		整理記入		損益計算書		貸借対照表	
	借方	貸方	借方	貸方	借方	貸方	借方	貸方
現金	144,000							
当座預金	638,000							
売掛金	1,260,000							
貸倒引当金		14,000		49,000				
			853,000	819,000				
				36,000				
借入金		300,000						
資本金		1,800,000	150,000					
引出金	150,000			150,000				
売上		2,579,000						
受取手数料		15,000						
仕入	1,845,000		819,000	853,000				
給料	230,000							
発送費	72,000							
広告料	50,000							

整理仕訳を
記入する。

資本金		1,800,000	150,000				
引出金	150,000			150,000			
売上		2,579,000					
受取手数料		15,000					
仕入	1,845,000		819,000	853,000			
給料	230,000						
発送費	72,000						
広告料	50,000						
支払家賃	120,000						
消耗品費	37,000						
雑費	28,000						
支払利息	17,000						
現金過不足		2,000	2,000				
	5,694,000	5,694,000					
(貸倒償却)			49,000				
(減価償却)			36,000				
(雑益)				2,000			
(当期純利益)			1,909,000	1,909,000			

合計一致！

精 算 表

平成〇年12月31日

勘定科目	残高試算表		整理記入		損益計算書		貸借対照表	
	借方	貸方	借方	貸方	借方	貸方	借方	貸方
現金	144,000						144,000	
当座預金	638,000						638,000	
売掛金	1,260,000						1,260,000	
貸倒引当金		14,000		49,000				63,000
繰越商品	819,000		853,000	819,000			853,000	
備品	284,000			36,000			248,000	
買掛金		984,000						984,000
借入金		300,000						300,000
資本金		1,800,000	150,000					1,650,000
引出金	150,000			150,000				
売上		2,579,000				2,579,000		
受取手数料		15,000				15,000		
仕入	1,845,000		819,000	853,000				
給料	230,000							
発送費	72,000							
広告料	50,000							

資産・負債・資本は貸借対照表に

費用・収益は損益計算書に

資本金		1,800,000	150,000				
引出金	150,000			150,000			
売上		2,579,000				2,579,000	
受取手数料		15,000				15,000	
仕給							
発行							
応支							
消費							
雑支							
現金過不足		2,000	2,000				
	5,694,000	5,694,000					
(貸倒償却)			49,000		49,000		
(減価償却)			36,000		36,000		
(雑益)				2,000		2,000	
(当期純利益)					146,000		146,000
			1,909,000	1,909,000	2,596,000	2,596,000	3,143,000
							3,143,000

当期純利益または
純損失を計算し、記入する。

146,000

12月15日

練習問題

模擬問題集6ページ



わしからの
プレゼント
語句と計算
の問題じゃ



商品有高帳
の問題じゃ

商品有高帳

- 商品の受け入れ、払い出しおよび残高の明細を記録する補助簿。
- 商品の種類ごとに口座を設ける。
- 同一種類の商品でも、仕入単価が異なる場合には、払出金額と残高金額を計算する上でどのような払出単価を用いるか決めなければならない。
- 先入先出法、移動平均法を学習する。

1 先入先出し法

- 先に受け入れた単価の分を先に払い出す方法

2 移動平均法

- 仕入れのつど、残高欄の金額と仕入金額を合計し、その合計額を残高数量と仕入数量の合計数量で割って、新しい平均単価を計算し、これを払出単価とする方法。

先入先出法の例

商品有高帳

(先入先出法)

A 品

単位 個

平成 ○年	摘要	受 入			引 渡			残 高				
		数量	単価	金額	数量	単価	金額	数量	単価	金額		
1	1	前月繰越	300	200	60,000				300	200	60,000	
	8	取手商店				200	200	40,000	100	200	20,000	
	10	柏商店	400	220	88,000				[100	200	20,000
	18	市川商店				[100	200		20,000	400	220
							200	220	44,000	200	220	44,000
	25	浦安商店	200	230	46,000				[200	220	44,000
										200	230	46,000
	31	次月繰越				[200	220	44,000			
							200	230	46,000			
			900		194,000	900		194,000				

移動平均法の例

商品有高帳

(移動平均法)

A

品

単位 個

平成 ○年	摘要	受 入			引 渡			残 高			
		数量	単価	金額	数量	単価	金額	数量	単価	金額	
10	1	前月繰越	200	500	100,000				200	500	100,000
	9	松山商店	800	550	440,000				1,000	540	540,000
	16	室戸商店				250	540	135,000	750	540	405,000
	22	香川商店	250	560	140,000				500	545	545,000
	29	高知商店							250	545	321,550
	31	次月繰越									

$$100,000 + 440,000$$

$$200 + 800$$

$$= 540$$



ここまでは
復習じゃ

- a. 四国商店はこの商品有高帳を次のどちらの方法で記帳しているか、番号で答えなさい。 1. 先入先出法 2. 移動平均法
- b. 10月15日の残高欄の単価を答えなさい。 $\frac{27000 + 110000}{50 + 200} = 548$
- c. 10月中のA品の売上原価を求めなさい。
- d. 10月中のA品の売上高を求めなさい。

商品有高帳

(移動平均法)

A 品 単位 個

平成 ○年		摘 要	受 入			引 渡			残 高		
			数量	単価	金額	数量	単価	金額	数量	単価	金額
10	1	前月繰越	150	540	81,000				150	540	81,000
	7	香川商店				100	540	54,000	50	540	27,000
	15	高知商店	200	550	110,000				()	()	()
	31	次月繰越				()	()	()			
			()		()	()		()			

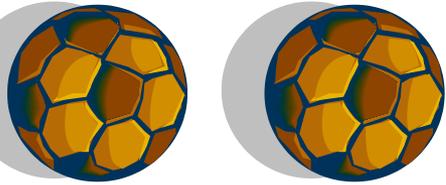


売上原価の求め方は？

売上原価の求め方の復習。

会計期間1月1日～12月31日
@100円

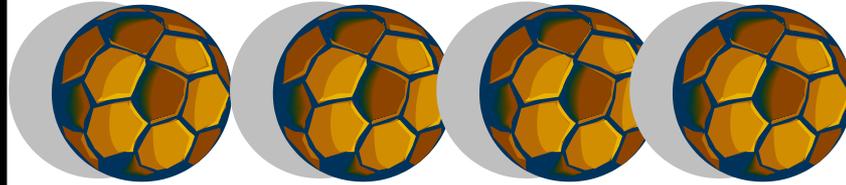
1月1日に倉庫にあるボール



200

(期首商品棚卸高)

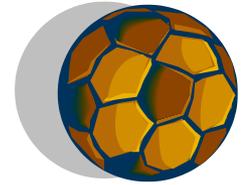
当期に仕入れたボール



+ 400

(純仕入高)

12月31日に倉庫にあるボール



- 100

(期末商品棚卸高)

売上原価 500

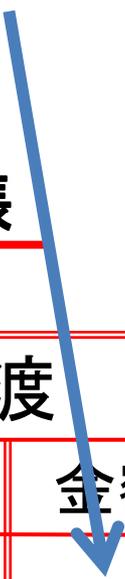
- a. 四国商店はこの商品有高帳を次のどちらの方法で記帳しているか、番号で答えなさい。 1. 先入先出法 2. 移動平均法
- b. 10月15日の残高欄の単価を答えなさい。
- c. 10月中のA品の売上原価を求めなさい。
- d. 10月中のA品の売上高を求めなさい。

商品有高帳

(移動平均法)

A 品 単位 個

平成 ○年	摘要	受 入			引 渡			残 高		
		数量	単価	金額	数量	単価	金額	数量	単価	金額
10	1	150	540	81,000				150	540	81,000
	7				100	540	54,000	50	540	27,000
	15	200	550	110,000				250	548	137,000
	31				250	548	138,000			
		350		192,000	350		192,000			



81,000+110,000-137,000 =54,000で求めてもよい。

- a. 四国商店はこの商品有高帳を次のどちらの方法で記帳しているか、番号で答えなさい。 1. 先入先出法 2. 移動平均法
- b. 10月15日の残高欄の単価を答えなさい。
- c. 10月中のA品の売上原価を求めなさい。
- d. 10月中のA品の売上高を求めなさい。ただし、A品は一個あたり¥800で販売している。**

商品有高帳

(移動平均法)

A 品 単位 個

平成 ○年		摘 要	受 入			引 渡			残 高		
			数量	単価	金額	数量	単価	金額	数量	単価	金額
10	1	前月繰越	150	540	81,000				150	540	81,000
	7	香川商店				100	540	54,000	50	540	27,000
	15	高知商店	200	550	110,000				250	548	137,000
	31	次月繰越				250	548	138,000			
			350		192,000	350		192,000			

単価 ¥800 に売り上げた個数をかければよい。



できたかな？



語句の問題
じゃ

(ア)に入る語句を選びなさい。

- a. 個人企業の決算において、損益勘定の貸方に残高が生じた場合には、純利益を意味し、(ア)勘定の貸方に振り替える。

12月31日 決算を行い、当期純利益¥150,000を損益勘定から資本金勘定に振り替えた。

(借) 損益 150,000 (貸) 資本金 150,000

損益

資本金

3,350,000	3,500,000
150,000	

81,500	1,500,000
	300,000
	150,000

(ア)に入る語句を選びなさい。

- a. 個人企業の決算において、損益勘定の貸方に残高が生じた場合には、純利益を意味し、(ア)勘定の貸方に振り替える。

解答 4 資本金

(イ)に入る語句を選びなさい。

- a. 総勘定元帳への転記が正しく行われているかを確認するために、総勘定元帳の各勘定の借方合計と貸方合計の差額を集計して(イ)を作成する。この表は決算の基礎的な資料などにも用いられる。

合計試算表の作成

各勘定の、**借方合計額**と**貸方合計額**を集めて作成する。

合計試算表

平成〇年4月30日

現金 1				借方	元帳	勘定科目	貸方
4/ 1	500,000	4/24	80,000	790,000	1	現金	80,000
4/13	290,000				2	買掛金	
					3	資本金	
					4	商品売買益	
					5	給料	

← 一致する! →

残高試算表の作成

各勘定口座の、**残高**を集めて作成する。

残高試算表

平成〇年4月30日

現金

1

借方

元帳

勘定科目

貸方

4/ 1 500,000 | 4/24 80,000

710,000

1

現 金

4/13 290,000

2

買 掛 金

3

資 本 金

4

商 品 売 買 益

5

給 料

← 一致する! →

合計残高試算表の作成

合計試算表と残高試算表を一つにまとめて作成する。

合計残高試算表

平成〇年4月30日

借 方		元帳	勘定科目	貸 方	
残高	合計			合計	残高
710,000	790,000	1	現 金	80,000	
		2	買 掛		
		3	資 本		
		4	商 品 売 買		
		5	給 料		

(イ)に入る語句を選びなさい。

- a. 総勘定元帳への転記が正しく行われているかを確認するために、総勘定元帳の各勘定の借方合計と貸方合計の差額を集計して(イ)を作成する。この表は決算の基礎的な資料などにも用いられる。

解答 3 残高試算表

()に金額を記入しなさい。

東京商店の期首の資産総額は¥1,700,000

負債総額は¥910,000であり、期末の負債総額は¥890,000であった。なお、この期間中の

収益総額は¥1,400,000 費用総額は

¥1,180,000であるとき、当期純利益は(ア)で、

期末の資産総額は(イ)である。

当期純利益の計算

収益総額－費用総額＝プラスの場合

費用

1, 180, 000

収益

1, 400, 000

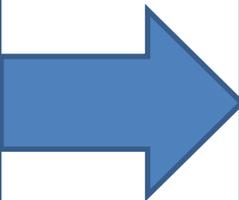
当期純利益

220, 000

(ア)の答えが当期純利益 ¥220,000となったから。

期首貸借対照表

期首 資産 ¥1,700,000	期首 負債 ¥910,000
	期首 資本 ¥790,000



期末貸借対照表

期末 資産 (イ) ¥1,900,000	期末 負債 ¥890,000
	期末 資本 ¥790,000
	当期純利益 ¥220,000



しっかり復習する
ことじゃ！